

聖徒の道

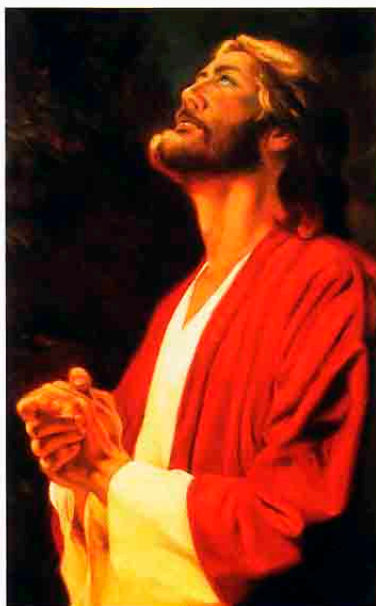
12
1996



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1996年12月号



表紙——「生ける預言者の言葉」(p.8参照)の中でゴードン・B・ヒンクレー大管長は、次のように述べている。「主イエス・キリストの神性を、この教会ほど強い証をもって宣言している教会はこの世にありません。」本号では、多くの人々が救い主の神性に対する証を分かち合っている。「小羊は生きておられる」(p.34参照)では、世界中の若人が主の实在について宣言している。表紙——「祈られる主」ローウェル・ブルース・ベネット画、裏表紙写真——「主の降誕」アトラス・フォト・デザイン社、星のオーナメント——ジェド・クラーク作。

こどものページ——「きょう……あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである。」(ルカ2:11-12) 6ページの「もろびと、こぞりて——大管長会から世界中の子供たちへのクリスマスメッセージ」を見ましよう(写真撮影/D・ケリー・オグデン)。

一般

大管長会メッセージ 感謝——救いの原則 第二副管長ジェームズ・E・ファウスト	2
生ける預言者の言葉 大管長ゴードン・B・ヒンクレー	8
喜びをもって与える ヘンリー・B・アイリング	10
あの「手に余る」クラス! ナイーダ・スティーブンス・ティムズ	16
よい羊飼いにに関する考察 ホーマー・S・エルズワース	18
ブルガリアから「もろびと、こぞりて」 ベス・デイリー	26
クリスマス用のオーバーコート	30
まず十分の一を オズボーン・N・スミス	48

青少年

パパの歌 ネットィ・ハンセーカー	22
自らの証 リサ・M・グローバー	32
小羊は生きておられる	34
火と氷の国 ジャネット・トーマス	42

定期特別記事

読者からの便り	1
家庭訪問メッセージ——贖い主の岩	25

こども

モルモン書物語—— ニーファイ人にみすがたをあらわされたイエス	2
もろびと、こぞりて 大管長会から世界中の子供たちへのクリスマスメッセージ	6
クリスマスボックス ジャン・M・スミス作	8
せかいのおともだち——みんな うたが だいすき	11
歌 ベツレヘムへの旅 ベッシー・サンダース・スペンサー, I・リード・ペイン	12
分かち合いの時間——じゅうじゅんのおくりもの カレン・アシュトン	14
おもちゃばこ	16

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語。季刊——チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン、ジェームズ・E・ファウスト
十二使徒定員会：ボイド・K・バックナー、L・トム・ベリー、デビッド・B・ヘイト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オーグス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド、ヘンリー・B・アイリソグ
編集長：ジャック・H・ゴースリンド
顧問：スペンサー・J・コンティエ、L・ライオネル・ケンドリック
教科課程管理部責任者
実務部長：ロナルド・L・ナイトン
企画・編集ディレクター：ブライアン・K・ケリー
グラフィックスディレクター：アラン・R・ロイボーク
国際機関誌スタッフ
編集主幹：マービン・K・ガードナー
編集主幹補佐：R・バル・ジョンソン
編集副主幹：デビッド・ミッチェル、ディーン・ウオーカー
編集補佐：ジェニファー・グリーン・ウッド
工程管理：メアリーアン・マーティンデール
出版補佐：ベス・デーリー
デザインスタッフ
機関誌グラフィックスディレクター：M・M・カフサキ
アートディレクター：スコット・バン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック
制作主幹：ジェーン・アン・ピーターズ
制作：レジナルド・J・クリステンセン、デニス・カービー、マシュー・H・マックスウェル
予約購読スタッフ
ディレクター：ケイ・W・ブリッグス
配送部長：クリス・クリステンセン
マーケティング部長：ジョイス・ハンセン
聖徒の道1996年12月号第40巻第12号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351
印刷所 株式会社 リック
定価 年間予約/海外予約2,400円(送料共)
半年予約1,200円(送料共)
普通号/大会号200円

Copyright©1996 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1994年8月 翻訳承認—1994年8月 原題—International Magazines December, 1996. Japanese. 96992 300

●定期購読は、『聖徒の道』予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●『聖徒の道』のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課☎03-3440-2351(代表) ●『聖徒の道』の配送についての問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター☎03-5668-3391

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. U.S.A. and Canadian subscription price is \$9.00 per year. SIXTY days' notice required for change of address. INCLUDE ADDRESS LABEL FROM A RECENT ISSUE. CHANGES CANNOT BE MAID UNLESS BOTH OLD ADDRESS AND NEW ONE ARE INCLUDED. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P. O. Box 26368, Salt Lake City, UT 84126-0368, USA. SUBSCRIPTION HELP LINE: 1-800-453-3860, U.S. EXT. 2947; CANADA EXT. 2031. CREDIT CARD ORDERS (VISA, MASTERCARD, AMERICAN EXPRESS) MAY BE TAKEN BY PHONE. PERIODICALS POSTAGE PAID AT SALT LAKE CITY, UTAH.

POSTMASTER:Send address changes to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P.O.Box 26368, Salt Lake City, Utah 84126-0368, U.S.A.

伝道活動に貢献

『リアホナ』(ロシア語版)に感謝しています。この機関誌は、わたしたちの伝道活動に大変役立っています。また天の御父の偉大な計画をよりよく理解する助けになっています。わたしは、指導者の記事を特に注意して読んでいます。現代のわたしたちへの啓示だからです。特に翻訳部門の人々に感謝したいと思います。彼らはすべての記事を非常に正確に、かつ美しい言葉で翻訳してくれていますが、実にすばらしいことだと思います。

ロシア・ロストフ伝道部
フェリックス・パンクラトフ長老

祈りの答え

わたしの最も大きな望みは、伝道に出て天父に仕えることです。でも家族の賛成が得られないので、ある日わたしは、伝道に行けるのだろうか、ほんとうに伝道に出るべきなのだろうか、と悩み始めました。祈って聖文を読んだ後に『扶助協会個人学習ガイド』を開くと、伝道に出る準備という課が目にとまりました。その数日後、『リアホナ』(スペイン語版)1995年12月号を読んでいて、「ドミンゴス・リアオの日々」という記事とドミンゴス兄弟のすべての経験にとっても感銘を受けました。ある意味で彼の経験は、わたしの経験とよく似ていました。彼の持っていた強さがわたしを強めてくれたのです。

天の御父がこれらの書物を通して答えを下さり、わたしが宣教師になるように望んでおられることを知りました。天父がわたしの祈りにこたえてくださったことに感謝しています。

エルサルバドル・サン・サルバドル西伝道部クーエスザルテペグ支部

ロクサーナ・マルガリータ・ガリアーノ・サナブリーア

高価な真珠

『リアホナ』(ポルトガル語版)は、わたしにとってまさに高価な真珠です。それは単に機関誌であるだけでなく、天からの祝福です。『モルモン書』の中で、ベニヤミン王は、自分の語る言葉を書き取らせ、それを声の届かない所にいる人々のもとに送りました。彼はこう言いました。「耳を開いて聞き、胸を開いて理解し、また心を開いて、神の奥義があなたがたの心に明らかにされるようにしなさい。」(モーサヤ2:9)

もしわたしたちが、『リアホナ』の預言者の言葉に耳を傾けるなら、わたしたちの生活の中でこれらの祝福が得られると信じています。

ブラジル・サンパウロ北伝道部
アントニオ長老

いつも心の中に

イエス・キリストはいつもわたしの心の中にいらっしゃいます。わたしたちが天父のもとに戻れるよう、イエスが御自身の命をささげてくださったことに感謝しています。救い主に対する証を得るためには、主に信仰を持つことはもちろん、聖文を読み、断食し、祈ることにより彼を知らなければなりません。クリスマスシーズン中にキリストとその誕生について考えるためにも集まるとき、わたしたちの生活が真理と幸福な気持ちで満たされるよう、わたしたちは心の扉をキリストに向けて開ける必要があります。

エクアドル、グアヤキル
ダリア・イバーラ



感謝—— 救いの原則

第二副管長
ジェームズ・E・ファウスト

信 仰の表れであり、また救いの原則でもある感謝についてお話ししたいと思います。主は言われました。「また、すべてのことの中に神の手を認めない者と、神の戒めに従わない者のほかに、人はどのようなことについても神を怒らせることはない、すなわち、ほかのどのような人に向かって神の激しい怒りは燃えない。」(教義と聖約59:21) この聖句から「すべてのことについて、主なるあなたの神に感謝」する(教義と聖約59:7)ことは単なる礼儀ではなく、守らなければならない戒めであることが明らかです。

長生きの良い点の一つは、現在よりも状況が悪かったときのことを思い出すという点です。わたしは長生きをして、逆境のもたらす祝福を知ったことに感謝しています。今でも思い出すのは大恐慌のときのことです。あのときの経験を通してわたしたちは大切な事柄を幾つか肝に銘じるようになりました。その一つは、何もなかったために物のありがたみがよく分かったことです。アメリカにおける1930年代初頭の大恐慌は人々に厳しい教訓をもたらしました。生きるためには儉約の精神を身に付ける必要がありました。自分がない物についてねたみや怒りを覚えたりせず、自分たちに与えられたわずかで質素な物、例えば焼きたての手作りパンやオートミールなどに対して感



ハンセン病患者のうちの「ひとり、自分がいやされたことを知り、大声で神をほめたたえながら帰ってきて、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。」(ルカ17:15-16)

謝の念を抱くようになったのです。

もう一つの例を挙げましょう。わたしの大好きな祖母、メアリー・キャロライン・ローパー・フィンリンソンは、農場で石けんを作っていました。手作りの石けんの材料としては、動物性脂肪の溶液や木の灰を用いました。この石けんは、つんと鼻をつくにおいのする、れんがのように堅い石けんでした。柔らかくいい香りのする石けんを買うお金はありませんでした。農場ではほこりや汗にまみれて働く人々の洗濯物が山ほどありましたが、土曜の夜には皆お風呂に入らなくてはなりません。ところが、あの手作りの石けんで体を洗うと、大変きれいにはなりましたが、洗う前よりも臭くなってしまいました。子供のころに比べ、はるかに多く石けんを使うようになった現在、わたしは柔らかくかぐわしい香りのする石けんに毎日感謝しています。

与えられている物を当たり前と考えるのは、^{こんにち}今日の悪の一つです。これについて、主は言われました。「ある人に贈り物が与えられても、彼がそれを受け取らなければ、それは彼にとって何の益があるだろうか。」(教義と聖約88:33)使徒パウロはテモテへの手紙の中で、末日において「人々は自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、高慢な者、神をそしめる者、親に逆らう者、恩を知らぬ者、神聖を汚す者」となるであろう(2テモテ3:2)と言っています。これらの罪は相互に関連性があり、感謝の気持ちを抱かない人はこれらすべての罪に染まりやすくなります。

感謝することを忘れなかったサマリヤ人の話には大切な意味が込められています。救い主がサマリヤとガリラヤを通った時のことです。「[イエスは]ある村にはいられると、10人のらい病人に出会われたが、彼らは遠くの方で立ちどまり、声を張りあげて、『イエスさま、わたしたちをあわれんでください』と言った。イエスは……『祭司たちのところに行って、からだを見せなさい』と言われた。

そして、行く途中で彼らはきよめられた。

そのうちのひとり、自分がいやされたことを知り、大声で神をほめたたえながら帰ってきて、

イエスの足もとにひれ伏して感謝した。これはサマリヤ人であった。

イエスは彼にむかって言われた、『きよめられたのは、

10人ではなかったか。ほかの9人は、どこにいるのか。

神をほめたたえるために帰ってきたものは、この他国人のほかにはいないのか。』

それから、その人に言われた、『立って行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのだ。』(ルカ17:12-19)

ハンセン病は忌み嫌われた病であったため、それに侵された人々は律法によりイエスに近づくことは許されませんでした。この恐ろしい病に侵された人々は、自分たちだけで肩を寄せ合い、ともに苦しみを味わわなければなりません(レビ13:45-46参照)。「イエスさま、わたしたちをあわれんでください」という、寄るべない彼らの叫びが救い主の心に触れたのでしょうか。病が癒され、清くなって社会に復帰できるという許可を祭司から受けた彼らは、あまりの喜びと驚きで、きっとどうしてよいか分からなくなったことなのでしょう。そしてそのような大きな奇跡に心から満足したようです。しかし彼らはその恩人を忘れてしまいました。どうしてそのように感謝の気持ちに欠けていたのか、理解し難いものです。そのような恩知らずは利己主義から生じる高慢の表れです。感謝をしに戻って来たのがサマリヤ人であったということには、どのような大切な意味があるのでしょうか。良きサマリヤ人の話のように、社会的あるいは経済的に恵まれない人がむしろ責任感も強く高潔であることが多いと言えるのではないのでしょうか。

救いの原則としての個人的な感謝の念に加えて、わたしたちが享受する多くの祝福に対する感謝の念についてもお話ししたいと思います。

この世代に教会員になった人々は会員たちからフェローシップを受けたことと思います。しかしわたしたちの先祖は、たいてい皆、大変な苦労や犠牲を経験しました。そのような犠牲はわたしたちにも引き継がれています。なぜなら、それは欠点があり不完全ではあっても尊い目的を持つ末日聖徒の遺産だからです。その目的とは、全人類が自分は何者なのかについて理解し、^{ほらから}同胞に対する愛をはぐくみ、神の戒めを守ろうと決意できるよう助けることです。これは福音の聖なる責任であり、わたしたちの信仰の真髄でもあります。

世の中でどんなことが起きているかを知るのは確かに大切です。しかし、現代の情報社会では暴力や世界中の人々の悲惨な^{ありさま}有様が次から次へとひっきりなしにわたし

たちの家庭に伝えられています。心を休め、霊的な力を取り戻すのが必要になる時があります。

わたしは、家庭の中で、聖餐会で、そして聖なる神殿において霊的な安らぎを得、心が満たされることを心から感謝しています。このような平安に満ちた環境の中でわたしたちの霊は休まり、故郷へ帰ったような安堵感を覚えるのです。

しばらく前にトンガ王国を訪問したときのことで。トンガ・ヌクアロファ南ステークのペニシマニ・ムティステーク会長がステークセンターで、音楽と朗読のプログラムの組まれた家庭の夕べを企画しました。その家庭の夕べはトンガの国王タウファハウ・ツポウ4世に敬意を払うために行われたものでした。国王と令嬢、孫娘にあたる内親王をはじめ、貴族や外交関係者が多数列席しました。会員たちは歌や朗読を交えたすばらしいプログラムを上演しました。内親王の一人が「おじいさん大好き」という歌を歌われました。ジョン・ソネンバーグ長老とわたしは短いお話を頼まれ、快く引き受けました。

プログラムが終わると、国王は王室の慣例を無視して、

教会員である臣民の上演に対する感謝のしるしとして、わたしたち夫婦とソネンバーグ長老夫妻にあいさつをするためにやって来られました。社交的儀礼は多くの所で守られています。しかし、親切な思いやりはだれにとってもうれしいものです。

わたしたちの心はあたかも二つの相反する思いが綱引きをしているようなものであり、いつもどちらかが心の中を占領しています。感謝の念がなかつたり消えたりすると、反抗心が入り込み、心の中を満たします。圧政に対する反抗のことではありません。道徳的な清さ、美徳、礼儀正しさ、正直、敬虔、両親への尊敬などに対する反抗という意味です。感謝の心を持つことは、偉大な人物になるための第一歩です。それは謙遜を表し、祈り、信仰、勇気、充実した健やかで幸福な生活、愛などをはぐくむ土台になります。

プログラムが終わると、国王は王室の慣例を無視して、教会員である臣民の上演に対する感謝のしるしとして、わたしたちにあいさつをするためにやって来られました。



しかし、人間の持つあらゆる長所について言えることは、「使わなければ失われる」ということです。使わないと、筋肉は衰え、技術は低下し、信仰はなくなります。モンソン副管長は、十二使徒定員会会員であったとき、このように述べました。「『感謝を忘れない。』この短い言葉には、幸せな結婚生活、長続きする友情、そして個人の幸福への鍵^{かぎ}があります。」(Pathways to Perfection『完全への道』p.254) 主は言われました。「すべてのことを感謝して受け入れる者は、栄光を与えられるであろう。また、この世のものも百倍、いやそれ以上、加えられるであろう。」(教義と聖約78:19)

わたしは、幼い子供たちを愛し、子供たちの尊さを知っている人々に感謝します。数年前、メキシコ・シティーから北のクリアカンへ向かう飛行機に夜遅く乗ったときのことで。座席の間隔も狭く、飛行機は満員でした。乗客のほとんどは親切なメキシコ人でした。機内の至る所にいろいろな大きさの荷物が置かれていました。そこへ、4人の幼い子供を連れた若い母親が通路を歩いて来ました。いちばん上の子は4歳くらいで、いちばん下の子は生まれたばかりのようでした。彼女は折り畳んだ乳母車とおしめ入れのほかに、幾つかのかばんを持っていました。子供たちは疲れ果て、泣きわめいていました。彼女が席を見つけると、周りの乗客が男女を問わず、文字どおり先を争って彼女を助けました。優しく子供たちをいたわり世話をし始めたのです。機内中の人が次から次へと子供たちをあやし、乗客全員がベビーシッターになったようでした。子供たちは抱えられた腕の中でおとなしくなり、間もなく眠りに就きました。特に驚いたのは、自分にも子供や孫がいるらしい数人の男性が体面を気にすることもなく、赤ちゃんを優しく抱いてあやしていたことです。おかげでその母親は飛行機に乗っている間、ほとんど子供の世話をせず済みました。ただ一つ残念だったのは、だれもその赤ちゃんをわたしに渡してくれなかったことです。わたしたちが幼い子供たちへの感謝の念や思いやり、親切な心を与えられているのは、救い主の子供たちに対する愛の表れです。このことを改めて学びました。

福音を根付かせるために苦勞し、犠牲を払った多くの国々の開拓者たちが示した信仰の遺産に対して、わたしたちはどのようにしたら恩返しできるでしょうか。勇敢

な手車隊の開拓者たちに対してどのように感謝を示せるでしょうか。彼らは迫害を逃れ、このユタの溪谷に安心して礼拝できる場を求め、手車にごくわずかな所持品を載せ、自力で焼けつくような平原を渡り、雪深い山道を越えてやって来たのです。マーティン手車隊、ウィリー手車隊、そのほか一連の手車隊の子孫たちは、先祖たちの信仰に対してどのように感謝の気持ちを表せるでしょうか。

この勇敢な人々の中に、たった一人で旅に加わったイギリスの少女エマ・バチェラーがいます。彼女はウィリー手車隊と一緒にでした。ところが、フォートララミーに着いたとき、荷物を軽くするという命令を受けました。エマは自分の所持品を全部、銅製のなべに入れて持って来ていましたが、そのなべを捨てるように言われました。その指示に従うことを拒んだ彼女は道端になべを置くと、その上に座り込みました。数日後にマーティン手車隊が来ることを知っていたからです。こうして彼女は、マーティン手車隊の到着を待って、ポール・ゴリー一家に加わりました。だいたい年月がたってからですが、ゴリー家族の若い息子は次のように書いています。「エマ・バチェラー姉妹がわたしたちに加わった。彼女は若く元気で、しかも一人分小麦粉の配給が増えることになったので、家族は喜んだ。」この家族と一緒にいるときに、ゴリー姉妹はお産をし、エマは助産婦として活躍しました。エマは母親と子供を手車に乗せて2日間、それを引く手助けをしました。

マーティン手車隊の中で亡くなった人は、むしろ苦難から救われたとも言えるでしょう。生存者の足や耳、鼻、指は凍傷になり、一生後遺症に苦しんだ人も大勢いました。しかし、21歳のエマは幸運にも無事この苦難を切り抜けることができました。

それから1年後、彼女はブリガム・ヤング大管長に会いました。彼は元気なエマを見て驚きました。彼女は言いました。「ブリガム兄弟、わたしには世話をしてくれる人も、面倒を見てくれる人もいませんでした。そこでわたしは自分で自分の面倒を見なければならなかったのです。サベッジ兄弟が『行かないように』と警告したのに、出発するよう皆に声をかけたのはこのわたしです。それはわたしの間違いでした。しかし、わたしは何とか償おうとしました。毎日手車を一生懸命引っ張りま

した。川岸へ着くと、靴と靴下、上着を脱ぎ、手車に載せて渡りました。手車を渡らせてから、反対側に戻って、幼いポールを背負って渡りました。それから腰を下ろして、純毛のネックチーフで足を一生懸命こすり、乾いた靴と靴下をはきました。』

このような開拓者たちの子孫は、自分たちの先祖が苦しみ抜いて守ってきた大きな目的を達成するように忠誠を尽くすことによって、わずかながらも恩返しができます。

ほかのすべての戒めと同様、感謝は、実り豊かな人生を送るうえで大切なルールです。感謝の心を持てば、身の回りにいつもあふれている多くの祝福に目が向くようになります。J・ルーベン・クラーク副管長はこのように述べています。「神があなたに授けてくださった祝福を放さないようにしなさい。祝福は得ようとして得られるものではない。祝福はそこにある。あなたの務めはた

このような開拓者たちの子孫は、自分たちの先祖が苦しみ抜いて守ってきた大きな目的を達成するように忠誠を尽くすことによって、わずかながらも恩返しができます。

だそれらの祝福を大事にすることである。」(Church News『チャーチニュース』1969年6月14日付け, p.2) このクリスマスの季節、わたしたちが感謝の気持ちをはぐくみ、神が惜しみなく与えてくださった多くの祝福を大切にすることができますように、また、天父と同胞に対してそのような感謝の気持ちを表すことができますように、心から願っています。□

ホームティーチャーへの提案

1. 与えられている物を当たり前と考えるのは、^{こんにち}今日の悪の一つである。
2. 恩知らずは利己主義から生じる高慢の表れである。
3. 感謝の心を持つことは、偉大な人物になるための第一歩である。それは謙遜を表し、^{けんそん}祈り、信仰、勇気、充実した健やかで幸福な生活、愛などをはぐくむ土台になる。
4. 感謝は、実り豊かな人生を送るうえで大切なルールである。感謝の心を持てば、身の回りにいつもあふれている多くの祝福に目が向くようになる。



生ける預言者の言葉

ゴードン・B・ヒンクレー大管長の教えと勧告



キリストへの証

「神の御子、また世の贖い主としての主イエス・キリストの神性を、この教会ほど強い証をもって宣言している教会はこの世にありません。この教会すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会は、主御自身の御名を頂いている教会です。主が模範によって示された愛の精神は、まさにわたしたちが実践しようとして努力している精神にほかならないのです。」¹

世の平和

「イエス・キリストの福音は、人々の中にある敵意を打ち砕く唯一の力です。もし人々がこの福音を実生活の中に取り入れ、神が御父であること、また人が皆兄弟であることと、キリストの贖いの力を認めるなら、この世の中は今よりもはるかに平和な世界となることでしょう。もっと多くの人々がそのような状態になるまで、平和はやって来ないでしょう。兄弟姉妹の皆さん、わたしたちが今ここに居るのは、実にそのためなのです。わたしたちが働き努めているのは、主イエス・キリストの福音を説き、人々の心の琴線に触れ、彼らがお互いを兄弟姉妹、また天の御父の子供と見なすことができるようにするためです。」²

主を愛しなさい

「『主を愛しなさい』ということは、単なる勧告ではありません。そうするのが望ましいという程度のもではありません。それはわたしたち一人一人に課せられた第1の最も大切な戒めなのです。なぜなら神の愛は、そのほかのあらゆる種類の愛の源だからです。

神の愛はすべての徳、善、人格の力、善へ導く忠実さの源です。……主なる神を愛し、その御子を愛してください。そして、御父と御子がわたしたちに注いでくださる愛に常に感謝してください。ほかの愛が廃れていくときでも、わたしたち人間に対する、人知を超えた神の無窮の愛、わたしたちのために命を捨てられた御子の愛は絶えることはありません。」³

神の約束

「主の約束は偉大です。驚くべきことに、主がわたしたちになすように望んでおられることには、必ず祝福が約束されています。イエス・キリストの福音を実践することは、犠牲ではありません。自分が行った以上のことが戻って来るのですから、決して犠牲とは言えません。それは一つの投資です。そして、イエス・キリストの福音の実践は、わたしが知っているどのようなものよりもすばらしい投資となります。なぜなら、その報いは永遠のものだからです。」⁴

世界の教会

「わたしたちの教会はアメリカの教会ではありません。イギリスの教会でもありません。日本の教会でもありません。わたしたちの教会は世界の教会であり、全世界に向けたメッセージを

携え、プログラムを備えています。そして、あらゆるプログラムは、人々を助け、高め、強めるために設けられています。つまり、よく言われているように、悪人を善人に、善人をさらに善い人間にし、キリストの福音とそこからもたらされる平安について教え、黄金律を模範により示そうと努めるためのものです。また、悩む人々に助けの手を差し伸べるプログラムなのです。彼らが、どこで、どのような状況にあらうともです。」⁵

ボルノグラフィー

「ボルノグラフィーの正体をよく理解してください。それはわいせつさといかがわしさという悪が混濁した酒のようなものです。それに酔って得られるのは、悲しみと墮落と失望以外の何ものでもありません。教会は主イエス・キリストの御名を受けている皆さんに対して、徳の光の中を歩み、そこから得られる力、自由、精神の高揚を自ら味わうように望んでいます。」⁶

正義を擁護する

「確固として義を守りましょう。世にあって、中途半端でなまぬるい態度は十分なものではありません。それは、雪の斜面をそりで下へ下へと滑り降りて行くようなものです。確固とした態度をとってください。どのような事柄であれ、正しく、真実なこと、倫理にかなない、善であることに対し、力を奮い起こし、人々とともに立ち上がってください。ここにお集まりの皆さんを見てみますと、もしわたしたちが、一致団結し、声を一つにして、『真実で正しくあるように』という天の神から

の宣言を擁護するならば、世の中のどのような主義主張でも、一変させるに十分な人数が集っていらっしやるように思います。』⁷

美德

「この世で美德ほど貴いものはほかにありません。さて、ここにお集まりの皆さんの中に、道を踏み外してしまい、過ちを犯してしまったために、もうすべてが取り去られた、と思い込んでいる方がいらっしやるとしたら、そのような方に申し上げます。まだすべてが取り去られたわけではありません。悔い改めの原則は、主イエス・キリストを信じる信仰に続く、福音の第一の原則です。あなたは悔い改め、過去の過ちを消し去ることができます。言ってみれば、壁の汚れをきれいに落とし、黒板の落書きを消し去るようなものです。そして、自分の人生をまっすぐ

に歩んで行ってください。もし、過去に何らかの形でそのような過ちを犯したことがあれば、監督と内密に話し、正しい道に立ち返り、清さを身に付けて前進してください。清くあってください。この世で、

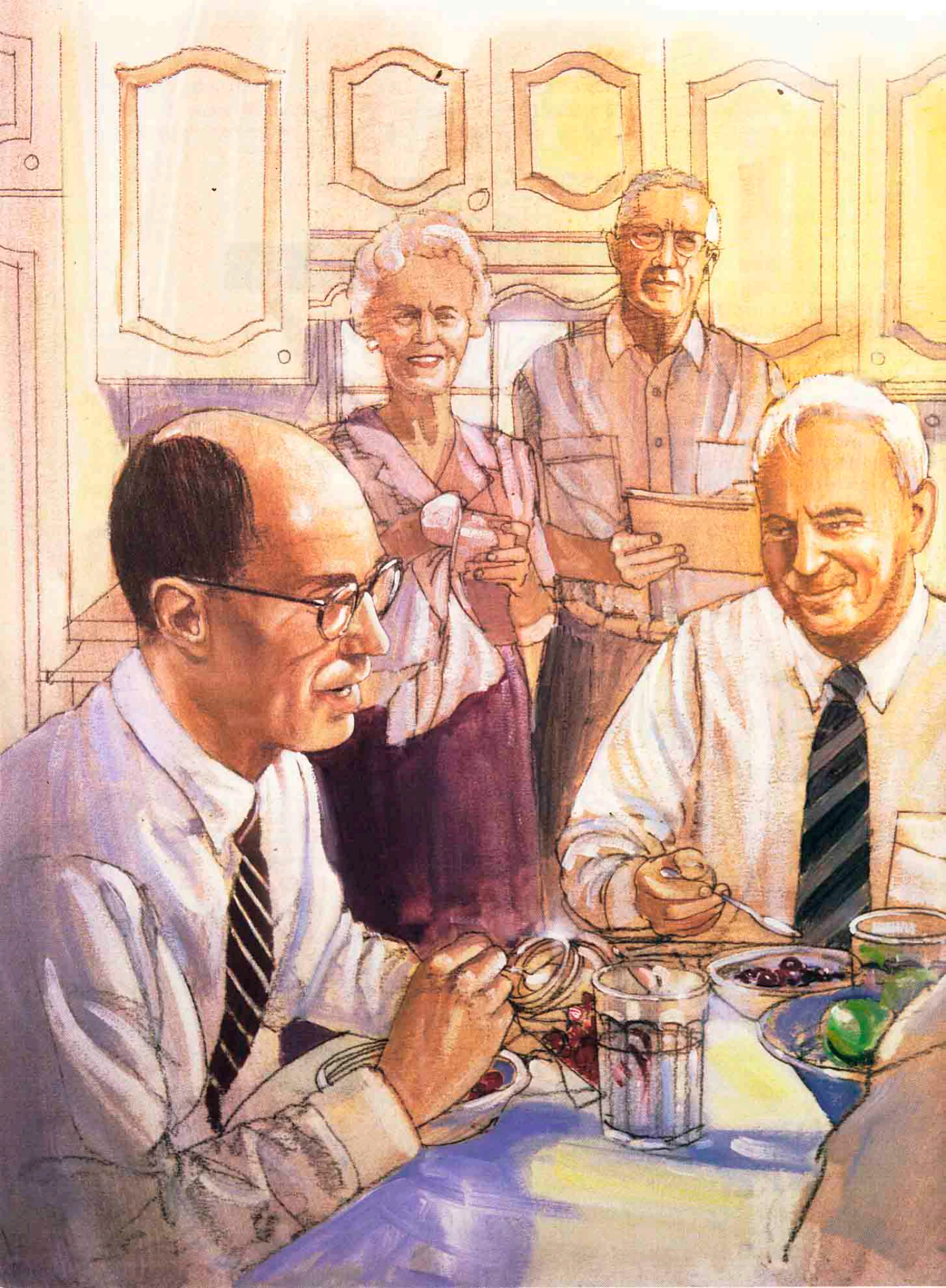
思いと言葉と行いにおいて清い女性ほど麗しい人はいません。また、そのような男性ほどすてきで魅力的な人もいません。』⁸□



注

1. 1995年8月26日、イギリスBBC放送ラジオ4、スザンヌ・エバンスのインタビュー
2. 1995年8月30日、イギリス、ソリフル、教会職員のディボショーナル
3. 1995年10月29日、アイダホ州レックスバーグ、リックスカレッジ地区大会
4. 1995年8月20日、ワシントン州タコマ地区大会
5. 1995年8月26日、イギリスBBC放送ラジオ4、スザンヌ・エバンスのインタビュー
6. 1995年8月17日、神殿長セミナー
7. 1996年2月18日、ハワイ、オアフ島地区大会
8. 1996年3月23日、カリフォルニア州サンディエゴ、ユースファイヤサイド

PAGE 8: PHOTOGRAPH BY JED CLARK. THIS PAGE: THE CRUCIFIXION, BY CARL HEINRICH BLOCH. ORIGINAL AT THE CHAPEL OF FREDRIKSBERG CASTLE, DENMARK. USED BY PERMISSION OF THE FREDRIKSBERGMUSEUM. INSET: SIMEON REVERENCING THE CHRIST CHILD, BY GREG K. OLSEN.



喜びをもって与える

十二使徒定員会会員
ヘンリー・B・アイリング

わたしはいつも偉大な贈り主になる夢を見てきました。だれかがわたしの贈り物を、涙で頬をぬらしながら、ほほえんで開けているのです。それは、贈った品物ではなく、贈る行為そのものが感動を与えている光景です。わたしのほかにもこのような夢を見ている人はいるでしょう。いや、もうすでにたくさんの人々が贈り物のエキスパートになっているかもしれません。でも、たとえエキスパートの人々でも、何が贈り物を偉大なものにするかについては、わたしが抱いたと同じ興味を抱いているのではないのでしょうか。

これまでのわたしの半生は、贈り物のエキスパートに囲まれた半生でした。でも、だれもわたしにその方法を伝授してはくれませんでした。そこでわたしは、彼らの行動を観察しながら一つの法則を作り上げてきました。このように、わたしの法則はたくさん贈り物とたくさん祝日を通して得られたものですが、ある日の一つの贈り物が、その法則を見事に描写してくれます。

それはクリスマスにはまだ遠い、ある夏の日の出来事です。わたしの母はその日の午後早くに亡くなりました。父と兄とわたしは3人で病院から家に戻りました。そして簡単な夕食を作り、弔問に訪れた人々と会話を交わしました。そのうちに夜のとばりが下りました。でも、電気もつけずにいたことを覚えています。

バルの音で父が玄関に出ました。お

ばのキャサリンとおじのビルでした。おじは手にさくらんぼの瓶詰めを持っていました。今でも、あのさくらんぼの赤紫色と、瓶の金色に輝くふたが目には焼きついています。おじは言いました。「これおいしいよ。デザートまだだと思って。」

確かにデザートはまだでした。わたしたち3人は台所のテーブルを囲み、さくらんぼをボールにあげ、食べました。その間、おじとおばは食器を洗ってくれました。おじはこう尋ねました。「電話してない人、まだいる？ 名前、言って。かけるから。」わたしたちは母の死を知らせた方がいいと思う親戚の名前を挙げました。こうして、キャサリンおばさんとビルおじさんは帰って行きました。わたしたちと一緒にいたのは、ものの20分でしょうか。

さて、わたしの法則は、一つの贈り物、すなわち1瓶のさくらんぼに焦点を合わせればよく理解できます。ではこの法則を、贈り物を受けた側であるわたしの目から説明しましょう。この見方は非常に重要です。なぜなら、与える側の行うことの中で大切なのは、受ける側がどう感じるかだからです。

わたしがほぼ自分の結論として言えることは、偉大な贈り物の授受にはいつも3つの要素があるということです。ではこれをあの夏の夜の出来事で検証してみることにしましょう。

第1に、おじのビルとおばのキャサリンはわたしたちの思いを察し、わたしたちと同じ思いでいてくれました。でも、感動はそれだけにとどまりませ

んでした。二人はわたしたちが疲れていて食事を十分に準備できないだろうと感じたのでしょう。また、自家製のさくらんぼの瓶詰めが、ほんの一瞬でも家庭というものの味をわたしたちに感じさせてくれるだろうと考えたのでしょう。自分の気持ちを理解してくれている人がいるということを知ったわたしには、そのさくらんぼの瓶詰めがいっそう大きな意味を持つものに思えました。さくらんぼの味は覚えていませんが、わたしの気持ちを察知して慰めを与えてくれた人がいたことは、今でも心に残っています。

第2に、その贈り物は見返りを要求しないものだとわたしは感じました。わたしには、ビルおじさんとキャサリンおばさんが自分たちで進んで、見返りを求めることなくその贈り物を持って来てくれたことが分かっていました。彼らはその贈り物を渡すことで喜びを得ていたようです。

第3に、そこには犠牲という要素がありました。こう言う人もいるでしょう。「与えることで喜びを得ているのであれば、犠牲とは言えないのではないですか。」でも、わたしには犠牲が見えます。わたしはキャサリンおばさんが自分の家族のためにその瓶詰めを作ったことを知っていました。彼らだってさくらんぼが好きだったと思います。彼女はそれを家族で楽しむ喜びを犠牲にして、わたしに分けてくれたのです。これはまさに犠牲です。しかし、わたしはこのときを機会に、驚くべき事実気づきました。おじとおばにとって、そのさくらんぼを自分たちで食べるよりもわたしたちに食べさせた方が喜びが大きかったに違いないということです。たしかにそれは犠牲でした。でも彼らにとってはもっと大きな報いがありました。それは、わたしたちの幸せです。贈り主がその贈り物をするに当たって犠牲を払っていることは、黙っていても相手に伝わります。でも、

受ける側が幸せになることによって、与える側にとって犠牲が喜びになることを感じさせてくれるのは、エキスパートだけです。

そうです。これがわたしの法則です。偉大な贈り物は3つのことを含んでいます。相手を感じるように感じること、自分から進んで贈ること、そして犠牲を祝福と考えることです。

さて、この法則を用いて今年のクリスマススの贈り物を今までとはまったく違ったすばらしいものにしようと思っても、それは簡単にできることではないでしょう。人の気持ちを理解できるようになるには、1回のクリスマススの贈り物だけでなく何回か実際にやってみる必要があります。また、進んで贈り物をし犠牲を喜びとするにも、時間がかかります。でも、少なくとも今年のクリスマススを良い受け手としてのスタートの年とすることが出来ます。わたしたちは相手の気持ちを察することで、その人を偉大な贈り主にすることが出来ます。何を見るかによって、どのような贈り物でも良いものに変えることが出来るのです。逆に、贈り物に込められた真の意味を見落とすと、どんな贈り物も価値のないものになってしまいます。贈り物には贈る側と受ける側の両方が必要です。でも、この方式は今年わたしたちが贈ったり受けたりする贈り物の品定めとしては使わないでください。そうではなく、わたしたちの心がどれだけ理解してもらえたか、またどれだけ喜んで、さらには犠牲を払って贈れたかを測る尺度としてほしいのです。

今からでも、今年のクリスマススを良い贈り主となるスタートとする方法があります。将来のクリスマスのために、これからご紹介するようなすばらしい贈り物を、今から準備し始めるのです。

リックスカレッジで宗教のクラスを教えていたときのことです。『教義と聖約』の第25章を教えていました。エ

マ・スミスが自分の時間を「記録すること、多く学ぶことに」費やすように言われている部分です（教義と聖約25:8）。クラスの学生に物を書く力を磨くように勧めると、前から3列目ぐらいに座っていた金髪の女子学生が手を挙げ、まゆをひそめてこう言いました。「わたしには当てはまりません。これから書くものといったら子供たちへの手紙ぐらいですから。」これにはみんな笑いました。

すると、後ろの方で一人の男子学生が立ち上がりました。学期中あまり発言をしなかった学生です。彼はほかの学生よりも年かきで、恥ずかしがり屋でした。話してもいいかと言って、彼はベトナムで参戦していたときのことを静かな口調で話し始めました。ある日、彼はライフルを置いたままで要塞の中を歩いて手紙を取りに行きました。そして手紙を手にした途端、ラッパが鳴り、急襲して来る大勢の敵からライフルの弾丸が撃ち込まれる音を聞きました。彼は両手で敵を追い払いながらようやくライフルを置いた場所に帰り、生き残った兵士たちとともに敵を撃退しました。負傷した者たちは運び出されました。そして彼は、死体の転がる中でほかの生き残った人々とともに腰を下ろしながら、手紙を開きました。

母親からの手紙でした。母親は、もし彼が義にかなった生活を続ければ必ず生きて帰って来るという霊的な体験をしたと書いていました。その学生はクラスみんなに静かな声でこう言いました。「その手紙はわたしにとって聖文となりました。わたしはその言葉を守りました。」そして彼は着席しました。

まだ子供のいない人も、いずれは子供をもうけることでしょう。皆さんには自分の子供の顔が思い浮かぶでしょうか。いつかどこかで彼らの生命が危機にさらされる様子が見えるでしょう



ベトナム戦争に派兵されていたある若い兵士が母親から手紙を受け取った。手紙には、彼が義になつた生活を続ければ必ず生きて帰って来るといふ霊的な体験をしたことが書かれていた。彼はこう語った。「その手紙はわたしにとって聖文となりました。」

か。そのときの彼らの恐れを感じられますか。皆さんは惜しみなく自分をささげたいと思いますか。皆さんが心から送りたいと思う手紙を書くのにどのような犠牲が必要ですか。そうした犠牲は、郵便集配人が来る1時間前でもう間に合いません。1週間や1年でも十分ではありません。何年もの年月が必要です。だからこそ、今始めてください。一つの良い方法は日記をつけることです。子供たちのことを心に描き、彼らの心に思いをはせ、彼らが親からどのような手紙を必要としているかを考えれば、日記を書くことは何ら犠牲とは呼べないことが分かるでしょう。

皆さんがあげたい贈り物で今から準備しておいた方がいいものも一つあります。わたしはそれを監督という立場で目にすることができました。一人の学生がわたしの前に座り、自分の犯した過ちについて話してくれました。彼は自分の子供たちには神権を行

使できる父親でいたいこと、そして子供たちと永遠に結び固められたいことを切々と訴えました。彼は悔い改めの代価と苦痛は大きいことを知っていました。そして彼はわたしに、決して忘れられない言葉を語ってくれたのです。「監督、わたしは戻ります。どんなことをしてでも必ず戻ります。」彼は悲しみを感しました。キリストに対する信仰があったからです。そのような彼でさえ、戻って来るのに数か月にわたる苦しみの日々が必要でした。

でも今年のクリスマス、どこかで一つの家族が、あるとき学生だった彼を神権を持つ父親として頂き、永遠の望みと地の平和を味わうことでしょう。彼はたぶん、カラフルな包装紙に包んだいろいろなプレゼントを家族のために用意するはずで。しかしそれらは、何年も前にわたしのオフィスで彼が準備を始めたあのプレゼントに比べれば、取るに足りないものなのです。あ

るとき彼は、当時はまだ夢にすぎなかった自分の子供のことを考えました。そして彼らのために早くから、惜しみなく自分自身をささげたのです。彼は犠牲として、自分のプライドと怠惰と思いやりのなさを克服しました。それらは、今から考えれば、彼にとっては犠牲でも何でもないことでしょう。

彼にそのような贈り物ができたのは、別の贈り物が遠い昔にささげられたからでした。天の御父が御子イエス・キリストを贖罪として与えてくださったのです。それは、わたしたちにとって計り知れない意味と価値を持った贈り物でした。

イエスはわたしたちすべてに、心から惜しみなくその賜物を授けてくださっています。主は言われました。「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである。

だれかが、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。」(ヨハネ10:17-18)

わたしは証をします。わたしたちが限らない犠牲を通してささげられたその賜物を受けるとき、それは授けてくださった御方にとって喜びとなります。イエスはこう教えておられます。「よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない99人の正しい人のためにもまさる大きいよろこびが、天にあるであろう。」(ルカ15:7)

わたしと同じようにこれらの言葉に慰めを受ける人は、救い主に対して贈り物をしたと思うことでしょう。主には、持っておられないものなど何もないようですが、そうでもありません。主はまだ、永遠にわたってわたしたち一人一人を再び御手のうちに抱いてはおられません。まだです。主は、わた

したち一人一人にみもとに戻ってほしいと願っておられます。主の御心に触れることにより、そのことに気づいていただきたいと思います。その贈り物は1日や1度のクリスマスではささげられません。しかし、わたしたちがみもとへ戻ろうとしていることは、今日からでも主に示すことができます。

それはもう行っているという人にも、まだすることがあります。わたしたちの周りには主が愛しておられる人々がいます。主はわたしたちを通して彼らを助けたいと思っておられます。

救い主の贖罪の贈り物を受けた確かなしるしの一つは、進んで人にささげる姿勢です。わたしたちの生活が清められてくると、わたしたちはそれに呼応してもっと気配りができ、もっと心が広くなり、自分にとって大切なものを進んで人にささげられるようになります。わたしは、救い主が最後に御自身のもとに来る人の例として物を贈る話を用いられたのはこのためだと思っています。

「そのとき、王は右にいる人々に言うであろう、『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。

あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、

裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである。』……

あなたがたによく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者

のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。』(マタイ25:34-36, 40)

わたしには、これが数々の偉大な贈り物を受け取ったときの最もすばらしい効果であると思えるのです。受けるわたしたちがもっとささげたい、たくさんささげたいと思うようになるからです。わたしはこのような贈り物により祝福された人生を送ってきました。そのことを心から感謝しています。

そうした贈り物の多くは何年も前に頂いたものです。もうすぐ預言者ジョセフ・スミスの誕生日を迎えます。12月23日です。彼はイエス・キリストの福音を回復するために、その才能と命をささげてくれました。わたしの先祖は回復された福音を受け入れて住み慣れた家や生活を捨てました。それは彼らのためでしたが、それ以上にわたしのためでもありました。

では、わたしたちは頂いた贈り物に感謝するとともに、このクリスマスに人々にどのような贈り物をしたらよいのでしょうか。「ただで受けたのだから、ただで与えるがよい。」(マタイ10:8)

わたしたちが惜しみなく与えることができますように。贈り物をする人々の気持ちをくむことができますように。また、強制や野心から贈り物をすることがありませんように。ほかの人々にもたらされる喜びを何よりも大切なものとして考えるときに、わたしたちの犠牲は甘美な喜びへと変わります。そのことを理解できますよう、心から祈っています。□

今年のクリスマス、どこかで一つの家族が、あのとき学生だった彼を神権を持つ父親として頂き、永遠の望みと地の平和を味わうことでしょう。彼はたぶん、カラフルな包装紙に包んだいろいろなプレゼントを家族のために用意するはずですが。しかしそれらは、何年も前にわたしのオフィスで彼が準備を始めたあのプレゼントに比べれば、取るに足りないものなのです。







あの「手に余る」クラス!

ナイーダ・スティーブンス・ティムズ

「何ですって! あの手に余る10代の子供たちを教えろですって。」監督室を出ながら、わたしはこう考えました。

夫は軍務に就いており、わたしは末期の癌がんを患う祖母の世話をするために、実家に帰って来ていた時期でした。それに、就学前のやんちゃな二人の子供と赤ちゃんがいました。零下の寒さの中で暖炉に石炭をくべる仕事もありました。祖母の容態は悪くなるばかりでした。このうえ、さらにもう一つ責任を負うなんて、とても耐えられそうにありませんでした。

家へ帰る途中、わたしはずっと泣いていました。日曜学校の16歳のクラスについては、いろいろ聞いていました。しかし、監督会はどうすべきかについて、断食して祈り、「主があなたを遣わされました」というのです。

最初、わたしは嫌な気持ちがありました。でも祈っているうちに、救い主がわたしのためにしてくださったことを思い起こすようになりました。そして、わたしにできる最も小さなことは、あのクラスを教えることだと分かったのです。その責任は依然としてわたしにとって大きな負担に思えましたが、わたしの態度は変わり、とにかく取り組み始めました。やがて、このクラスの生徒たちを何とか理解したいと思うようになりました。そして数か月するころには、一人一人の生徒のことを知り、愛するようになったのです。

クリスマスイブ、日曜学校の男の子たちがわたしを助けに来てくれました。突然、重荷が軽くなったように感じられました。

それでもなお、山積するほかの問題のために、その年のクリスマスは楽しい気分どころではありませんでした。クリスマスイブの日、居間のクリスマスツリーのそばに独りで座り、幼い息子のためにおもちゃの車を組み立てようとしていましたが、なかなかできませんでした。外は大雪です。突然、恐ろしいほどの寂しさを感じました。自分が独りぼっちに思えたのです。それまではどんな問題にも何とか対処できると思っていました。でもその晩は、地球の反対側にいる夫を思いながら、重荷に押しつぶされそうでした。だんだんと衰弱していく祖母の看病、幼い子供たちの世話、厳しい寒さ、暖炉に石炭をくべる仕事、なかなか組み立てられないおもちゃ。これらすべてに「もう耐えられない」と思いました。わたしはうなだれて、涙を流しながら自分の重荷を主にゆだねました。

ひざまずいていると、ドアをたたく音がします。「こんな遅い時間に、一体だれかしら。」そう思いながらドアを開けると、日曜学校の生徒である3人の男の子が雪まみれで立っていました。そりで遊んでいて、わたしの家の明かりが見えたので、クリスマスのあいさつを言いに立ち寄ったとのことでした。中に招き入れ、熱いココアとパイでもてなしました。

やがて彼らは例のおもちゃを組み立ててくれました。クリスマスプレゼントのラッピングも皆の助けで終えられました。こうして、すべてきれいに整いました。少年たちは一人一人わたしを抱き締め、「いつもぼくたちのすばらしい先生、そして友達でいてくれてありがとう。良いクリスマスを!」と言い残して帰って行きました。少年た

ちが街頭に照らされて帰る姿を見送っていると、突然、重荷が軽くなったように感じました。その晩、わたしはひざまずいて、あの少年たちを送ってくださったことを、天父に感謝しました。

数週間後、祖母は容態が悪化し、入院しなければならなくなりました。夜通し付き添うことになりましたが、わたしには、祖母と二人きりで過ごせる最後の時間がかけがえのないものと思われました。日曜学校の女の子たちは、わたしが病院にいる間、交替で子供たちの面倒を見てくれました。ある女の子は毎日放課後にやって来ては、わたしが休めるよう、家族のために夕食を作ってくれました。男の子たちは石炭庫を作ってくれました。そして、もういちいち石炭を運ばなくても済むよう、石炭用のとしまでこしらえてくれました。また、古い暖炉を直すなど、手のかかる仕事をことごとくやってくれました。まさに、これらの若者たち一人一人の愛と思いやりに包まれた日々でした。彼らがいなかったら、わたしは苦難に耐えられなかったでしょう。

祖母は5月に亡くなり、夫はやっと家に帰って来ました。わたしの「手に余る」10代の生徒たちがわたしを助けてくれたあの冬以来、数年の年月が流れました。でもわたしは、あのとき学んだ教訓を決して忘れません。主がわたしたちにするよう望まれることなら何でも、わたしたちは行えるということ、そして奉仕からわたしたちが受ける祝福は、わたしたちの努力をはるかに上回るほど大きなものであるということを、今、わたしはあのころよりもずっとよく分かります。□



よい羊飼いに 関する考察

ホーマー・S・エルズワース

クリスマスクの季節を迎えると、わたしたちは羊飼いが羊の群れを見守る様子を描写している『聖書』のくだりにしばしば思いをはせます。羊飼いの場面は実に象徴的です。これは、天父が心からの愛と関心をもってすべての子供たちを見守っておられることを思い起こさせてくれるからです。また、天父がわたしたちを御自分のもとへ導くために愛する御子をお遣わしになったことも思い出させてくれます。御子はよい羊飼いとしてこの上なく神聖な召しを果たしてくださいました。

聖文には、イエスの降誕、イエスのこの世における務め、そして全人類の救い主としての使命を予型と影によって示している箇所が数多くあります。羊飼いと羊の群れを引用している箇所の多くは象徴として用いられていることがはっきりしています。事実、救い主御自身も教えの中でこれらの象徴をしばしば用いておられます。

よい羊飼い

イエスはこの世における使命を説明するに当たって、御自分をよい羊飼いと呼ばれました。「わたしはよい羊飼いである。よい羊飼いは、羊のために命を捨てる。」(ヨハネ10:11)自分の羊を持つ羊飼いは羊を愛するだけでなく、自分の命を危険にさらしてまでも羊を守ります。

このようなほんとうの羊飼いとは対照的に、羊の群れに関心を払わない、ただ賃金を得るための手段として羊の世話をする羊飼いもいます。「羊飼いではなく、羊が自分のものでない雇人は、おおかみが来るのを見ると、羊

をすてて逃げ去る。そして、おおかみは羊を奪い、また追い散らす。」(ヨハネ10:12)

これはサタンを象徴していると思われます。このおおかみは不意に現れては羊を捕らえ、追い散らすのです。ここで言う、雇われの羊飼いとはサタンの誘惑に抵抗するのではなく、サタンの言いなりになる人です。しかし、救い主はよい羊飼いであって、天父のすべての子らのために進んで御自分の命を捨てると言われました。ご承知のように、救い主は文字どおり命を投げうって人類あがなを贖あがなわれました。

救い主はヨハネによる福音書第10章7節で、人類が天父の王国に入れるのは主を通してであり、主を通してのみ人類は天父の王国に至る門に入ることができると説いておられます。「よくよくあなたがたに言う。わたしは羊の門である。」

イエスの時代の羊飼いは季節によって二通りの飼育方法を使い分けていました。冬の間は大きな建物の天井に梁はりを渡して木の枝や麦わらで屋根を作ってその中に羊を入れ、春や夏になると町中の羊を集めて、屋外の広い囲いの中で放牧しました。しかし略奪者から羊を守るために放牧場の周囲には高い塀を巡らしていました。夜になると羊飼いたちはそれぞれの群れを集めて大きな群れにまとめ、夜通し一人の見張り番を付けて群れを守らせたのです。

イエスはこの比喩ひゆを使って、御自身が夜通し羊の番をする羊飼いであると言われました。これは、主が群れを見守る番人であり、福音を知らない人や天の御父と御自

分の関係を知らない人は群れに入ることができないという意味です。イエスはまことに門を守る者であり、「ここには僕を使われない」のです（2ニーファイ9：41）。

羊飼いに属する羊の群れ

救い主は羊と羊飼いの^{ひつがい}の比喻を使って、主に従う者たちは主の声を聞き分けるとも説いておられます。世の中から主に従う者たちを見つけ出して、連れ出してくださる方が真の羊飼いであることを彼らは知っているのです。「羊は彼の声を聞く。そして彼は自分の羊の名をよんで連れ出す。」（ヨハネ10：3）

わたしはイスラエルで、犬を呼ぶときのように口笛を鳴らして羊を集める少年を見たことがあります。2年間イスラエルに住んだことのあるわたしの義理の息子によると、一部の羊飼いは羊をよく飼い慣らして、羊の名前を呼ぶと、その羊が群れの中から出て来るそうです。羊の性質をよく御存じだったイエスは、主の群れに属さず、主を認めない人々やパリサイ人を羊にたとえて説明しておられます。彼らは主に呼ばれても出て来ようともせず、従おうともしませんでした。

ヨハネによる福音書の第9章には、安息日に盲人を癒された主をパリサイ人が問い詰めようとした場面が描写されています。かなり長い間にわたるやりとりがあった後に、救い主は次のように言われました。「羊の囲いにはいるのに、門からでなく、ほかの所からのりこえて来る者は、盗人であり、強盗である。」

門からはいる者は、羊の^{ひつがい}羊飼である。

門番は彼のために門を開き、羊は彼の声を聞く。そして彼は自分の羊の名をよんで連れ出す。

……羊はその声を知っているのだから、彼について行くのである。

ほかの人には、ついて行かないで逃げ去る。その人の声を知らないからである。」（ヨハネ10：1-5）

救い主は、パリサイ人から不当に破門された盲人が、今や、よい羊飼いの群れの中に避け所を見いだしたことを指摘しておられます。

幾つかの点でパリサイ人をやぎにたとえることができ

ます。多くの群れには羊とやぎが混じっています。しかし、羊とやぎは性格が大きく異なるために、一緒に牧草を食べさせることはできません。やぎは様々な問題を引き起こすため、羊飼いは一般的に羊を飼育する方を好むようです。羊は性格が穏やかで、ゆっくり歩き、そして普通は従順です。勝手気ままに走り回るやぎには、このような性質がありません。

羊飼いの愛

救い主はまた、すべての人が大切であることを羊にたとえて説明しておられます。ルカによる福音書第15章4節には次のように記されています。「あなたがたのうち、100匹の羊を持っている者がいたとする。その1匹がいなくなったら、99匹を野原に残しておいて、いなくなった1匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。」そしてマタイによる福音書第9章36節にはこう記されています。「また群衆が飼う者のない羊のように弱り果てて、倒れているのをごらんになって、彼らを深くあわれまされた。」

羊飼いの監視を受けずに山地に放牧されている羊にはあらゆる危険が待ち受けています。群れに属していてもほとんどの羊は目的もなくさまよって歩き、略奪者に襲われる危険に身をさらしながら群れについて行きます。しかし、安全な道を導く羊飼いに従うことを教えられている羊もいます。いずれの場合でも、もし羊を見守る羊飼



いがいなければ、略奪者に襲われて散り散りにされるか殺されてしまうでしょう。

イスラエルの人々は羊飼いのいない羊でした。彼らは自分たちの祭司に裏切られ、諸外国の支配を受けてきました。さらに、間もなくエルサレムの崩壊により散らされることになっていました。イエスは御自分に従う人できるだけ多く連れ戻すために遣わされていました。しかしイエスは従う者がごくわずかであることを最初から御存じでした。

救い主の時代には、羊は大きな群れになると数千頭にも膨れ上がっていました。この大きな群れを多くの家族で所有し、数人の羊飼いで世話をするのは、この方が安全性が高いため、人々は好んで、大きな群れの中で羊を飼っていました。小さな群れには羊飼いが一人しか置かれていなかったため、略奪者の攻撃を受けやすい状態にありました。しかし、救い主はルカによる福音書第12章32節で次のように言うておられます。「恐れるな、小さい群れよ。御国を下さることは、あなたがたの父のみこころなのである。」救い主は御自分に従う者たちに対して、数千頭の群れでなくても、多くの羊飼いに守られていなくても恐れる必要はないとおっしゃっています。天の御父は彼らがただ一人の羊飼いによって守られるように定めておられるのです。

羊飼いからの召し

救い主は羊の^{ひつ}比喩を使ってシモン・ペテロを召されました。ヨハネによる福音書第21章には、復活された主がテベリヤの海で漁をしていた使徒たちに、一つの場所を示して網を下ろすように言われたことが記されています。彼らがそのとおりにするとおびただしい量の魚がとれました。しばらくして、食事を終えてから、イエスは言われました。「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか。」ペテロは「主よ、そうです」と答えました。

救い主はそれから3度、主の羊を養うように命じられました(15-17節)。これは非常に重要な出来事でした。イエスはこのとき、天父のもとへ帰るに当たり、ペテロ

に対して地上の群れの頭となるようにとお命じになられていたからです。救い主はペテロに対して、この新しい務めは救い主の群れに属している羊を救うことであるとされたのです。

神の小羊

小羊の比喩は十字架のはりつけと贖い^{あがな}という分かりやすい設定で用いられています。ヨハネによる福音書第1章29節には次のように記されています。「その翌日、ヨハネはイエスが自分の方にこられるのを見て言った、『見よ、世の罪を取り除く神の小羊。』」

毎年、過越の祭りを迎えると人々は、イスラエルがエジプトから解放されたことを祝うために汚れのない子羊をほふって家族の食卓に並べました。過越の祭りに先立って選んでおいた雄の子羊を全会衆の前で犠牲としてささげ、その血を家々の門口にふりかけたのでした。

ここで述べられている小羊は、罪に汚されていない御方で、その贖いによってわたしたちを罪のかせから解放してくださる救い主を表すためのぴったりの象徴となっています。使徒行伝第8章32節では、一人のエチオピア人がイザヤ書から「彼は、ほふり場に引かれて行く羊のように、また、黙々として、毛を刈る者の前に立つ小羊のように、口を開かない」という聖句を読んだことが記されています。エチオピア人はピリポに、イザヤはだれのことを指しているのかを尋ねました。そこでピリポはイエスについて教えを説き始めました。この羊の象徴は、羊について知っていて、真の意味で救い主の謙遜、忍耐、柔和な特質についても理解できていた人にとっては、意義深い比較の機会を提供しました。エチオピア人は教えを受けた後に、バプテスマを受けました(34-38節参照)。

聖文に予型と影として登場する羊と羊飼いは、救い主と地上における主の使命に関するわたしたちの理解と認識を深めてくれます。わたしたちはこれらの表現方法によって、主の使命、主が弟子たちを召された方法、全人類に対する主の愛がどのような性質のものであるかをより深く理解することができるのです□

パパの歌

ネッティ・ハンセーカー

ILLUSTRATED BY KEITH LARSON

あのクリスマスのことは、いつまでも忘れないと
います。それが両親の家で過ごす最後のクリスマス
になるだろうと予感していました。だれもが承知して
いたように、クリスマスが終わればわたしはすぐ伝道に
出るようになっていました。その後は結婚するでしょう
し、それから先のクリスマスは自分の築くささやかな家
庭で過ごすことになるからです。

もちろん、クリスマス当日を家族とともに祝う機会は、
これから何年もあることは知っていました。しかし、ク
リスマスの季節を祝うこと、つまり何日もお菓子を焼い
て過ごしたり、毎晩キャロルを歌ったり、クリスマスの
靴下をつるしたりという、クリスマス前の数週間の活動
を一緒に楽しむことは、もう二度とないのです。わたし
は大人になりつつありました。家を出るのです。そう考
えただけで怖くなりました。

その年のクリスマスは、何か月も前から楽しみにして
いました。クリスマス前の1週間はすばらしい日々でし
た。お菓子の家を作ったり、キリスト降誕の場面を演じ
たり、ツリーを飾ったりという活動を十二分に味わい、
暖かな我が家の隅々を見て回っては新しい発見をしまし
た。しかし、そんな幸福感の中でさえ、これも今年で最
後なのだという思いを払いのけられませんでした。

わたしの家族には、クリスマスの伝統がたくさんあり
ました。子供たちがいちばん楽しみにしていたものの一
つに、クリスマスイブの活動がありました。年下の子供
から順番に、パパが一人ずつ下の居間に連れて行きます。
それから、古い揺りいすに腰かけてその子を抱き、特別
なクリスマスの歌を歌ってくれるのです。歌は毎年同じ

歌で、わたしたちは皆歌詞を暗記していました。その歌
は、クリスマスの朝の、天使たちや踊るおもちゃについ
ての歌でした。ツリーの明かりが暗い部屋で光る中、パ
パの腕に抱かれて座っていると、すっかり安心して
きたものです。そしてなぜか、明日になれば完璧
なまでに楽しいクリスマスの朝が訪れる、と
確信していました。こうして、わたしたち
が何歳になっても、どんなに大きくなっ
ても、クリスマスイブにはパパがいつも揺り
いすの上で揺らしてくれたのでした。

その晩も、ベッドに横になりながら、弟や妹たちが一
人一人階下に連れて行かれるのを見ていました。その年
は、わたしが家にいる子供の中でいちばん年上でした。
姉が伝道に出たからです。下の居間から、パパが子供一
人ずつに歌って聞かせるあの歌が繰り返されるのが聞こ
えてきました。そして、わたしの番が来ました。わたし
はパパの後について階段を下り、居間に行きました。パ
パは例の大きないすに座り、両腕を広げました。

「まだひざに座ってほしいの」とわたしは尋ねました。

「もちろん」と父はほほえみました。わたしは喜んで
父のひざの上に乗る、ひざを抱えて父に寄り添いました。

「こうして揺らしてもらうのも今晚が最後ね」とわた
しは言いました。

「そうだね」と父が静かに答えました。

聞き慣れた歌の最初の旋律が流れ始めると、クリスマ
スイブにこの歌を聞いたこれまでの年月を思い返しまし
た。すると突然わたしの中に、このままずっとここにい
たいという思いが込み上げてきました。そこはとても暖





かくて、心地よかったですし、いったん家を出ると、これから先の日々がどんなものになるのかまったく予想がつかなかったからです。わたしは泣きだしてしまいました。

歌よ、終わらないで、とわたしは思っていました。
パパが歌い始めました。

おまえがぐっすり眠るとき
天の恵みがあるように。
目を覚ませば、踊るおもちゃと
キャンデー・ケーンとクリスマスの喜びが
おまえのことを待っている。
天使たちがおまえを生涯見守って
わたしと同じように
おまえを愛してくれるように。
いとしいわが子よ、ぐっすりお眠り。

前の年まではこの歌を聞くと、翌朝の楽しみのおことが心に浮かんだものでした。しかしこの最後の年は、パパが人生と将来について歌っているのだと気づきました。壊れたり、すり切れたりするおもちゃではなく、人生の旅路で見つける永遠の喜び、わたしには当時まだ想像もできなかった喜びについて歌っていたのです。その晩、天使にわたしを見守ってください、と願う父の歌声に、その夜だけではなく、自分がそばにいてあげられないすべての夜にわたしを見守ってほしいという思いを感じました。

歌の最後の旋律が消えていくのを聞きながら、わたし

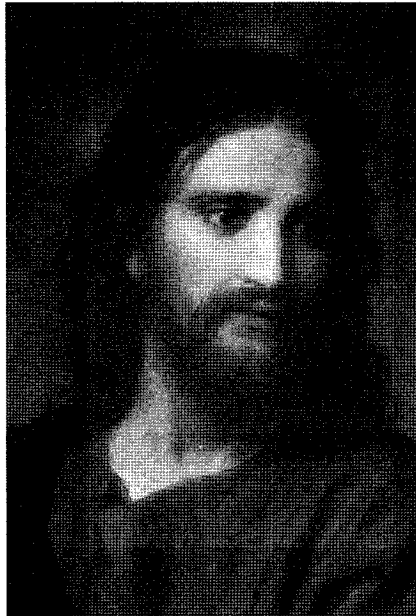
は流れる涙をぬぐおうともしませんでした。^{くらやみ}暗闇の中で、ツリーの明かりを見詰めながら、歌が終わってしまっても長い間、パパと二人でいすに揺られ続けていました。

揺れながら、わたしたちが地上に来る前夜、つまり天国での最後の夜はどうだったのだろうと考えていました。天父はわたしたちを強く抱き締め、地上で見いだす喜びや踊るおもちゃのことを話してくださったのでしょうか。地上の生活が想像以上の喜びをもたらすのだと知りながら、わたしたちは泣いて、天父と永遠にともにいることを願ったのでしょうか。天父はきっと、わたしたちのために歌い終わってからも長い間わたしたちを抱いて、わたしたちの地上の旅を見守るように天使たちに頼み、天父のものを離れている年月が幸福であって、いつの日か御自身のもとに戻って来れるようにと祈ってくださったことでしょう。

その夜わたしは、地上での父の腕の中で揺られながら、天父に思いをさせ、慰めを得ました。パパは毎日そばにいてわたしの悩みを聞くことはできないけれども、わたしには天のお父様がいてくださいます。将来どんなことが起きても、わたしには地上の父だけでなく、天の父の助けも受けられるのです。そして、天父はわたしの道を導き、天の家に帰って二度とそこから離れなくてもよいようにして下さるのです。

わたしは、あの夜、天父もまたこう歌ってくださっていたように感じました。「わたしと同じようにおまえを愛してくれるように。いとしいわが子よ、ぐっすりお眠り。」□

あがな
贖い主の岩



DETAIL FROM CHRIST AND THE RICH YOUNG RULER, BY HEINRICH HOFMANN

「唯一の堅固な土台」(『モルモン書』ヤコブ4:16)

ス ペンサー・W・キンボール大管長は、ある総大会の説教の中で、1946年に大津波が押し寄せたすぐ後、ハワイ島を訪問したときのことを話しました。100人以上の人が命を失い、何千人もの人が家を失いました。ある家族は丘へ登ってかろうじて死を逃れましたが、丘の上から見下ろすと、自分たちの家が津波に押し流され、消えていくのが見えました。

キンボール大管長はこう語っています。「わたしたちもまた、悪魔が解き放つこのような強力な破壊力に立ち向かわなければならない時がある。罪、邪悪、不道德、墮落、専横、欺瞞、陰謀、不正直という高波の脅威に、わたしたちは常にさらされている。わたしたちが用心しなければ、それらは大きな力を持ち、非常な速さでやって来て、わたしたちを滅ぼしてしまう。

しかし、わたしたちには警告の声がある。……高台へ逃れるか、さもなければ押し流されないようにしっかりとつかまっているものが需要である。」(『鉄の棒をしっかりとつかむ』『聖徒の道』1979年2月号, p.7参照)

堅固な土台を築く

わたしたちの唯一堅固な土台であり、最終的にどのような試練や悲しみ、恐れにも打ち砕かれることのない礎は、救い主、贖い主イエス・キリストです。

預言者ヒラマンは息子たちに、次のことを思い起こさせました。「わが子らよ、覚えておきなさい。あなたたちは、神の御子でありキリストである贖い主の岩の上に基を築かなければならないことを覚えておきなさい。そうすれば、悪魔が大風を……送るときにも……あなたたちを引きずり落とすことはない。なぜならば、あなたたちは堅固な基であるその岩の上に建てられて〔いる〕からである。」(ヒラマン5:12)

キリストに対する堅固な土台を築くには、主の福音の基本的な原則を取り入れる必要があります。ある教会員は、救い主がわたしたちにまず最初にすべきだと教えられた事柄を最初に行うことによって、救い主を生活の土台にすることを学びました。その中には、什分の一や献金を速やかに納める、祈る、聖文を勉強する、教会の責任を優先することなどが含まれます。

この教会員は次のように書いています。「これらの事柄を行うにつれて、わたしの人生はより幸福になりました。わたしの一つ一つの行いは、救い

主を知り、救い主のようになるという目標へ向かう霊的な進歩のための踏み石となったのです。」(Ensign『エンサイン』1995年9月号, p.41)

堅固な土台は平安をもたらす

わたしたちがイエス・キリストに対する信仰を築くにつれて、この世の困難な問題によりよく対処できるようになります。そして、生活がいつそう安定するおかげで、それぞれの状況にあって苦勞しているほかの人を助ける力がわいてきます。このようにすると、天父がわたしたちに望んでおられるとおり、キリストのようになることができるのです。

十二使徒定員会会員リチャード・G・スコット長老は、妻を若くして癌で亡くした後、総大会でこのように証しました。「最も困難な問題をも克服する力と勇気と能力を伴った永続する幸福は、イエス・キリストを中心とした生活から生まれます。主の教えに従順になれば、堅固な土台ができます。これには努力が必要です。それこそ一夜漬けでできるものではありませんが、主の時に従って解決策がもたらされ、平安が満ち、むなしい思いが払いのけられます。」(『主を信頼する』『聖徒の道』1996年1月号, p.19)

●わたしたちの霊の土台を強めるにはどうしたらよいでしょうか。

●福音という土台は、試練のときに永遠の見地に立って考えるうえで、どのように役立つでしょうか。□

ブルガリアから

ベス・デイリー

そのアイデアはとてもシンプルなものでした。……まるで曲の一節のように。1993年も終わりに差ししかかったある日のこと、ブルガリア・ソフィア伝道部のデール・J・ワーナー部長は「伝道部には特別なクリスマスプログラムが必要だ」と、奥さんのレニーに言いました。

レニーもそう感じました。そして、彼女はすぐに行動を開始し、ついにはそれを形にしたのです。しかし、これは在りきたりなクリスマスのプログラムであってはなりません。歓喜のシンフォニーとなるべきものだったのです。つまり、ほかに類を見ない、格調高い、ブルガリア語で行う、キリストを中心としたパフォーマンスです。それは、透き通った声で「^{きよ}聖し、この夜……」と、ブルガリア語で歌う8歳の子供を照らし出す、スポットライトが始まるというものです。

その特別な瞬間が来る前に、小さな奇跡が起こる必要がありました。共産主義の支配下にあったブルガリアでは、クリスマスは公に放逐されていました。しかし、ついに1990年の共産主義崩壊後、ブルガリアには大規模なキリスト教復興が起こり、末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師はすぐに、救い主の誕生と主の福音の回復を宣べ伝え始めました。

ブルガリアで教会が成長するにつれ、キリストを中心としたクリスマスプログラムについて、一般市民の思いも膨らんでいきました。ワーナー部長夫妻は、元ジャーナリストで教会の会員でもある、ズラティーナ・ビリアルスカにプログラムの台本を作ってくれるように頼みました。ズラティーナはためらいました。

「できるかどうか分かりません。」彼女はワーナー姉妹に言いました。「そのようなプログラムをどんなふうにするにすればよいのか、まるで分かりません。難しすぎます。」ワーナー姉妹はズラティーナに、はっきり断る前にそのアサイメントについてよく考えてくれるように頼みました。

次の朝、ズラティーナはワーナー姉妹に連絡しました。「わたしは家に帰ってから、そのことについて考え始めました。」ズラティーナは言いました。「すると、どんなプログラムにしたらよいのか、心に浮かんできたのです。」翌日、彼女はワーナー姉妹に、一晩中かかって仕上げた3部構成のプログラムの下書きを渡しました。

「それは、とても美しいものでした。」ワーナー姉妹は言います。^{かんべき}「完璧でした。彼女はクリスマスの意義をしっかりとつかんでいました。」

ワーナー姉妹と宣教師のレスリー・

PHOTOGRAPHS COURTESY OF MISSIONARIES IN THE BULGARIA SOFIA MISSION; BACKGROUND PHOTOGRAPHY BY STEVE BUNDERSON; ELECTRONIC IMAGE COMPOSITION BY PAT GERBER

「もろびと、こぞりて」

デービス姉妹の助けを借りて、ズラティーナは最終原稿を完成させました。プログラムは、シンプルなものではありませんでした。それは、3つの異なる場面、すなわち伝統的なブルガリアのシーン、日常的な西ヨーロッパのシーン、そして飾りけのないキリスト降誕のシーンから成っていました。これには28曲の歌が含まれ、そのうちの多くはブルガリア語に翻訳する必要がありました。手の込んだ背景や衣装、そして100人を超えるキャストと聖歌隊を必要としました。そんな大作に取り組む会員たちの心は大きな不安に駆られました。

教会に入る前にオペラ歌手だった、イバンカ・パシノバ姉妹が、製作を指揮しました。彼女はなじみの薄い何曲かをブルガリア語に翻訳し、聖歌隊を組織しました。リハーサルに来るために片道2時間もかかったにもかかわらず、聖歌隊のメンバーは熱心にその務めを果たしました。彼らは欠かさずリハーサルに出席しました。プログラムの音楽部分はこうしてまとまりを見せ始めました。

何人かの人はその才能を駆使して、衣装や背景を作りました。腕のいい仕立屋のエレナ・シュティリアノバは3場面すべての衣装を作ったり、見つけてきたりしました。国立劇場で女優を





しているある求道者は、サンタクロースの衣装を準備しました。画家である別の姉妹は、凝った背景の垂れ幕を描きました。紙がなかなか手に入らない国内で、彼女は何とかして背景作りに必要な材料を見つけ出しました。サンタクロースの衣装を提供した求道者は、国立劇場からスポットライトも借りてきてくれました。そして、ついでにそれを取り扱える専門の技師まで連れてきたのです。

製作の複雑さや参加者と観客の人数を考えると、伝道本部の小さな部屋には収まり切らなくなったので、伝道本部の資金を使って、ソフィアにあるモスクワホテルの会場を借りることになりました。そこには、小さなステージにアップライトピアノが1台、そして非常に限られたスペースがあるだけでしたが、それは見つけられる最善の場所でした。聖歌隊のメンバーは、出演者全員がステージに立てるよう、自分たちの歌わないときは舞台の陰に立つことを、申し出てくれ、「立ち見席だね」と笑っていました。

リハーサルが何週間も続いていくうちに、準備作業も軌道に乗ってきました。会員たちの興奮は、次第に自信につながる力へと変わっていき、だれもが救い主の誕生やその大切さをたたえる機会を待ち望むようになりました。

しかし、その興奮が膨らんだとき、一団のハーモニーはある不協和音によって壊されてしまいました。新聞やテレビが教会を批判するようになったのです。宣教師たちは暴力を受け、ワー

ナー部長宅の窓には石が投げつけられました。ある晩などは、伝道本部の玄関一面にわいせつな言葉がなぐり書きされました。

教会への悪感情が高まったことで、モスクワホテルの支配人は教会にクリスマスプログラムを行わせた場合の起こり得る結果に不安を募らせ始めました。プログラムが始まるまで36時間を切るころになって、彼女は予約したはずの部屋が使えなくなったと伝道本部に連絡してきました。

何人かの会員たちはその知らせを聞いて、クリスマスプログラムは中止せざるを得ないと思い込み、落胆の色を隠せませんでした。しかし、ワーナー部長はそれでも主に信頼を置いていました。

彼は言いました。「天父はわたしたちの状況を御存じで、わたしたちがどれほどこのプログラムを必要としているかも御存じです。主の手にゆだねましょう。」

主は彼らの祈りを聞かれました。伝道部長補佐のトレント・マーレー長老とハノン・フォード長老が、伝道部の払い戻し金をモスクワホテルに取りに行くと、支配人はなぜ彼らにメインフロアの部屋を使わせなかったのか話した後、2階へ案内しました。

「あなたがたが正面玄関からでなく、裏手の階段を上ってロビーを使わないと約束してくださるなら、こちらにある別の部屋を使ってください。」彼女はそう言って、前よりもずっと大きな会場のドアを開けました。そこは予約

していた部屋の2倍半はあり、すてきなグランドピアノが置かれていました。さらには、クリスマスツリーをはじめ、ほかの飾り付けまで施されていました。

ソフィアのある寒い土曜の午後、宣教師たちはプログラムにやって来た会員と求道者を迎え、裏口へ案内し、そこから皆で目立たぬようにホテルへ入って行きました。結局、400人以上の人々が会場をにぎわしました。休日に働くことを決めて、嫌そうな顔つきだったスポットライトの技師でさえ、人々の活気を損ねることはできませんでした。

150人の聖歌隊は美しい歌声を響かせ、全員の合唱の際は、観客も参加しました。最後のシーンで、ヨセフとマリヤ役の若い二人がかいばおけに赤ちゃんを寝かせるころには、会場は喜びと音楽で満ちあふれていました。スポットライトの技師たちでさえ、一緒になって歌い、手をたたいていました。

御霊をととても強く感じていたので、だれもその場を去ろうとしませんでした。でも、どんな公演でもそうであるように、クリスマスプログラムも終わりを迎えなくてはなりません。オープニングを飾った同じ少女が、アカペラの独唱で「^{きよ}し、この夜」を歌い、幕を閉じました。家路に就いた観客と参加者の心には、まさにその日の経験でもある「^{こたま}もろびと、こぞりて」が木霊し、ブルガリアの寒気を暖めていました。□



クリスマス用の オーバーコート

我が家には、匿名でだれかにクリスマスプレゼントを贈るという伝統がありました。でも、主人が失業した今年は、一体どうしたらよいのでしょうか。

匿名



1973年、結婚して最初のクリスマスに、夫はクリスマスの特別手当として40ドルを受け取りました。プレゼントを買うお金はあまりなかったのですが、わたしたちは夫であり、父親である一家の大黒柱を亡くしたばかりのある家族のために、そのお金を使うことにしました。この家族のためにプレゼントを買ったり、そっと気づかれないように玄関の外に置いてきたりするのあまりに楽しかったので、わたしたちはこの秘密の計画を家族の伝統にすることにしました。

時が流れ、わたしたちは4人の子供に恵まれました。子供たちは皆、背丈が伸びて、年に1度クリスマスのときにだけ使う、ある特別なコートが着れるようになると、順番に配達役を務めました。そのコートというのは、大人用の濃い色のコートで、フードが付いており、変装して闇に紛れて人の玄関先にこっそりプレゼントを置いてくるにはうってつけのコートでした。

毎年秋になると、わたしたちはその年の「秘密の家族」と何をプレゼントするかを投票で決めました。その年にだれがクリスマス用のコートを着てプレゼントを配達する名誉ある役を務めるかは、子供たちが決めました。経済的に余裕がある年は、おもちゃや本やお菓子のほかに、手製のキルトや洋服などもプレゼントしました。ゆとりがない年には、靴下に小さな品物を詰めて贈りました。

待ち兼ねたクリスマスイブがやって来ると、運よく選

ばれた子は、例のコートを身にまとったうえ、変装を完成させるために手袋をし、大きな長靴をはきました。そして家族全員で車に乗り込み、選ばれた家族の家から少し離れた場所に駐車し、我が家の小さな妖精がその家の玄関までそ

っと忍んで行くのです。人に見つかったり、怪しまれたりするかもしれないという恐れが、いっそう楽しさを増してくれたものです。

居心地のよい家に戻ると、皆で熱いココアとパンを手集まって、その晩の冒険を振り返ってみるのでした。おなか膨らみ心が温まったところで、『聖書』の中からクリスマスの物語を読み、救い主がその生涯を通じて奉仕について教えてくださっていることを感謝しました。

クリスマスはいつもすばらしく、わたしたちはこの伝統を欠かしたことがありませんでした。

結婚して20年目の春、主人は失業しました。クリスマス前にはもう再就職していたものの、我が家の家計はかなり切迫していました。自分たちのクリスマスプレゼントすらほとんど期待できない状態でしたから、その年は秘密の伝統を実行できるだろうかと考えました。

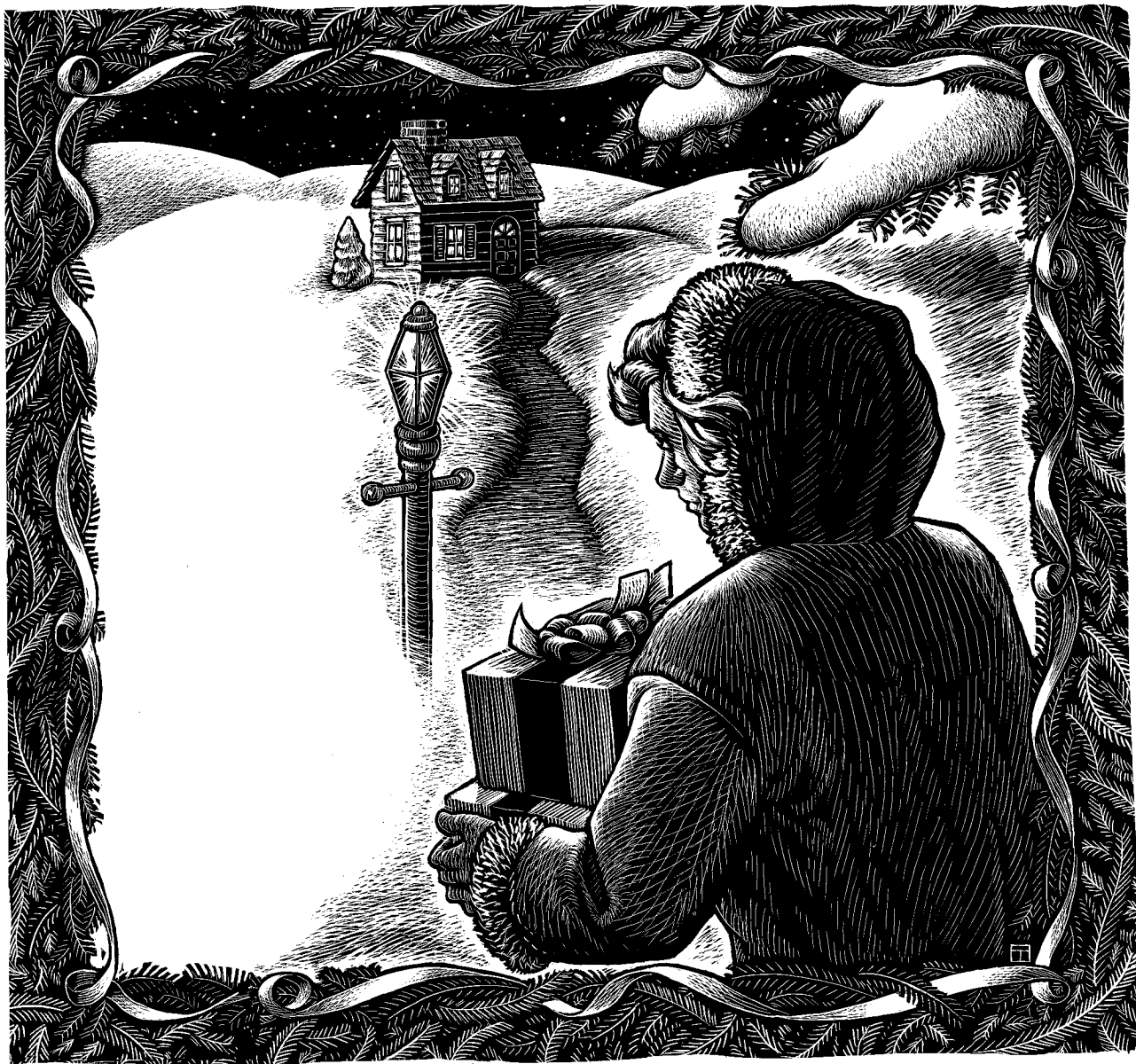
家庭の夕べの中で、その年のクリスマスがどんなクリスマスになるのか、家族で話し合いました。そして、プレゼントは少ないかもしれないけれど、自分たちには暖かい家と食べ物、それに家族が与えられていることに心から感謝しました。やがて、家も家族も体を温める場所

も、何もない人々のことを考えました。それから、あのクリスマス用のコートを着て走り回る子供たちのかわい
い短い足や、フードの奥の輝く目のことを思い出しまし
た。どうしたら今年このコートを役立てることができる
のでしょうか。

ある日曜日の朝、わたしたちは子供たち全員とクリス
マス用のコートを車に乗せ、町に出かけました。よくホ
ームレスの人たちが夜を明かす場所まで運転すると、温
かい衣類を何も身に着けていない人を探しました。一人
で歩いている男性を見つけると、夫と息子がその人に歩
み寄りました。残りの家族は車の中から、その人がコー

トを受け取ってほほえむのを見ていました。彼がその年
わたしたちが贈れる唯一のプレゼントであるクリスマス
用のコートを着るのを見たとき、わたしの目には涙があ
ふれました。

あれからクリスマスが幾度か訪れましたが、幸いわた
したちは、我が家の伝統を守り続けることができいま
す。しかし、あのクリスマス用のコートのことはだれも
忘れていません。プレゼントの配達役に立った、あの
変装用のコートが活躍した長い年月を考えると、わた
しの心をいちばん温かくしてくれるのは、コートをプレ
ゼントしたあの年の思い出なのです。□



ILLUSTRATED BY BRAD TEARE

自らの証^{あかし}

リサ・M・グローバー

価値あるものすべてに言えることですが、証^{あかし}を得るのにも時間と忍耐が必要です。しかし、どれほど多くの努力を要するとしても、救い主に関する証を築くことには、それだけの価値があります。証は自らに残された生涯を支える最も堅固な土台となります。証を強める方法の一つは、ほかの人の証から学ぶことです（本誌「小羊は生きておられる」p.34参照）。救い主に関する知識を深める方法はほかにもたくさんあります。その幾つかを以下に紹介してみましょう。

聖文を用いる

- クリスマスの物語を子供に読んで聞かせる。
- 『新約聖書』と『モルモン書』の中から、イエス・キリストの業について読んで聞かせる。
- キリストの生涯について記した聖文の中から特定の章を読む。その後、その章に関してセミナーや家庭の夕べのレッスンで証を述べる。
- 救い主に関する聖句の中から特に好きなものを選び、覚える。
- 救い主の時代に生きた使徒の証を読む。また、彼らの生涯についてできるかぎり多くのことを学ぶ。
- ジョセフ・スミス、三人の証人、八人の証人の証を読む。

才能を生かす

- 救い主のことを歌った賛美歌、例えば、ブルース・R・マッコンキー長老の「救い主、われ信ず」（『賛美歌』72番）などの歌詞をよく味わう。
- 救い主の生涯と贖いから学んだことを詩や短い散文にまとめる。
- 支部やワードの聖歌隊に参加する。指導者たちと若い男性・女性の聖歌隊を組織することについて、あるいはクリスマスの物語に関するコーラスを交えた朗読劇を

計画することについて話し合う。

- 楽器を弾けるなら、ワードのだれかが救い主の生涯について歌う際の伴奏をしてあげる。
- 適切な集会で、霊的な話をさせてもらう。または、定員会やクラスでレッスンの手伝いを申し出る。この場合、常に救い主の生涯に心を向ける。
- 自分の地区の宣教師のためにクッキーやデザートを作ってあげる。また教会員でない友人や隣人にお菓子を作って持って行く。
- 美しい風景画を描き、クリスマスの特別な贈り物として、友人や大切な人にプレゼントする。その際、創造主に関する自分の証を添える。

ほかの人とともに学ぶ

- 現代の預言者がイエス・キリストに関する自らの証について何を語っているか学ぶ。預言者が自らの証を築ききっかけとなった経験について記した記事を読み、彼らの模範に従うよう努力する。
- 自分の証をほかの人と分かち合う。自分の信念である証は、分かち合うことによって、明確になり、深まるものである。
- 子供に、教会の機関誌の中から「イエスの誕生」（『聖徒の道』1995年12月号、pp.32-39）など、救い主の誕生を扱った記事を読んであげる。
- 自分の両親や兄弟の持っているキリストのような良い特質を見いだす。この方法により、従うべき良い模範を見いだせるだけでなく、容易に怒らない態度を養うことができる。
- 専任宣教師に手紙を書き、救い主に対する自分の証を分かち合う。
- もし先祖の日記が手に入るようであれば、そこから救い主に対する先祖の思いが記された部分を探し出して読む。□





小羊は 生きておられる

イエス・キリスト^{あかし}を証する全世界の若人

18 32年2月、預言者ジョセフ・スマスはシドニー・リグドンを筆記者として『聖書』の靈感訳の作業に携わっていました。二人は復活に関して記されたヨハネによる福音書第5章29節を読み終えたときに、現在、教義と聖約第76章に収められている示現を受けました。

「わたしたちは御父の右に御子の栄光を見、その完全を受けた。……

そして今、小羊^{あかし}についてなされてきた多くの証の後、わたしたちが最後に小羊^{あかし}についてなす証はこれである。すなわち、『小羊は生きておられる。』

わたしたちはまことに神の右に小羊を見たからである。また、わたしたちは証する声を聞いた。すなわち、『彼は御父の独り子であり、

彼によって、彼を通じて、彼から、もろもろの世界が現在創造され、また過去に創造された。そして、それらに住む者は神のもとに生まれた息子や娘となる』と。」(20、22-24節)

ほとんどの人はこの世において救い主を見ることはないかもしれませんが。しかし、わたしたちは聖霊の力によって、主が生きておられること、主がわたしたちを愛しておられることをはっきりと知ることができます。^{ろうにやくなんにょ}老若男女を問わず多くの教会員がこのことを証

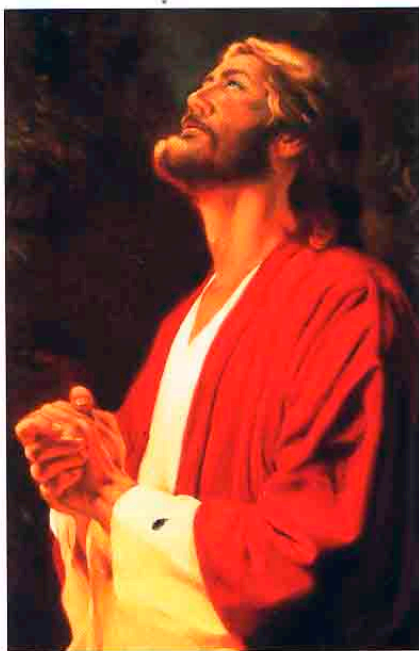
しています。

これから紹介するのは、世界各地に住む若人から寄せられた救い主に対する証です。これらは彼らが与えることのできる最も大切な贈り物と言えるでしょう。



「クリスマスの季節になると、わたしは救い主の生涯について深く考え、また救い主の身に起きた数々の出来事に思いを巡らします。わたしは救い主が生きておられ、いつもわたしを支え見守ってくださることを知っています。人生で様々な問題にぶつかるとき、わたしは救い主に思いを寄せ、主がそばにおられたとしたら自分はどんな行動を取るだろうか、と考えるようにしています。」

—シモーヌ・ラムゼイ
(ガイアナ共和国、ジョージタウン)





「1994年に父の仕事の関係で引っ越した先で、ぼくはいじめと迫害を経験しました。でも、イエス・キリストに対する証が強くなるにつれ、人々への愛で心が満たされていきました。迫害に耐えるのは大変でしたが、今こうして心に平安を得ていることを救い主に感謝しています。イエス・キリストはぼくの傷を癒してくださいました。主に仕える者にふさわしい人となって、主の近くにいられる特権を大切にすること、ぼくの願いはそれだけです。」
 —フェルナンド・イスラエル・サンチェス・パントーヤ
 (メキシコ、セラヤ)



「イエス・キリストは人々に教えを説かただけでなく、教えを自ら実行されました。主はいつの時代にあっても最も優れた教師です。謙遜、赦し、従順、忠実、聖さ、徳、奉仕、愛について主が示してくださった模範を知れば知るほど、わたしの主に対する尊敬と愛はますます大きくなっています。寂しいときも、自分の失敗を悲しんで泣いているときも、主はわたしを支えてくださいます。主の永遠の愛に包まれるとき、両親や指導者、愛する人々から抱き締められるときよりもはるかに大きな安らぎを感じます。」
 —リサ・ハヨーノー
 (インドネシア、カディピロー・スーラカータ)



「この教会によってわたしの生活がどれほど変わったかを言葉で表すのは、とても難しい気がします。わたしが教会に入ったのは1995年10月です。バプテスマを受けた瞬間に経験した喜びと幸せな気持ちは今も心に残っています。神が生きておられること、そして神はわたしたちすべての人を愛しておられることを知ったことによって、悪や誘惑に耐える力を得ました。神は生きておられ、わたしたちを愛しておられるので、御子イエス・キリストを遣わしてくださいましたこと、イエス・キリストがわたしたちのために命を捨てて、罪を贖ってくださいましたことを、わたしは確かに知っています。」
 —イレナ・イェリストラトーバ
 (ロシア、イェカテリンベルグ)

「わたしは数年前に祝福師の祝福を受けるまで、その大切さを理解していませんでした。でも今は、祝福文を頻りに読んでいます。祝福文が与えられているのは、救い主がわたしを愛しておられるからです。救い主がいっしょにいらなければわたしは何の価値もない存在だということを知っています。救い主が生きておられることを知っています。そして、霊界へ行ってしまった父と兄にいつか会える日が来ることを主に感謝しています。」

—ガエルレ・タブツー・マヒナ (フランス領ポリネシア、タヒチ)

CHRIST AND THE SAMARITAN WOMAN, BY CARL HENRICH BLOCH, ORIGINAL AT THE CHAPEL OF FREDRIKSBERG CASTLE, DENMARK. USED BY PERMISSION OF THE FREDRIKSBERGMUSEUM.







「わたしはキリストとキリストの教会について証が得たかったので、お祈りをすることにしました。何日か後に突然、福音が確かに真実であるという気持ちを感じました。わたしは天父が祈りにこたえてくださったと知り、心がとても安らぎ、幸せな気持ちでいっぱいになりました。」

—クリスティン・タバニルラ

(オマーン、マスカット)



「昨年、父が事故に遭ってけがをしました。それから経済的に大変でしたが、周りの皆から助けられ、何とか克服できました。事故が起きた直後のわたしは神に不平を言っていました。でも今は神に感謝しています。わたしは周りの人たちと変わらない普通の若者ですが、ほかの人たちにはないものを持っています。わたしは神様が生きていらっしゃることを知っています。幸せな毎日が続いたらよいとは思いますが、わたしには証がありますから、幸せな生活が続いても不幸な状態に陥っても両方を受け入れることができます。」

—金海英

(韓国、ソウル)



「わたしはこれまでの人生で出遭った様々な困難な局面を、証によってすべて乗り越えられました。問題にぶつかったときには、わたしの最も大切な宝物であるキリストの福音に、ひたすら目を向けるようにしています。そうすれば慰めが与えられます。わたしの周りには天父の力によって生活に変化をもたらされた人々が大勢います。」

—セリオ・カルネイロー・ヒメネス長老
(ブラジル、テアラー、フォルタレザ)

「わたしは幼いころからとても恥ずかしがり屋でした。それは今も変わりません。人前で証をするときなどは、まるでライオンに引き裂かれようとでもしているかのようにおびえてしまいます。ですから、『聖徒の道』を通じてこのような方法で世界中の人々に証ができることを感謝しています。わたしは天父とイエス・キリストがいらっしゃることを、ジョセフ・スミスがほんとうに預言者だったことを知っています。聖文を読み、戒めを守ることによって、この世で幸せになり、神の王国で住む場所を与えられることを知っています。」

—イサベル・アスーエ・ンドンゴ・マシアス (スペイン、マドリッド)







「毎週日曜日に教会に行っ
て聖餐にあずかることによ
り、その週に受ける誘惑に
立ち向かう力を与えられて
います。わたしはこの世で
の生活がイエス・キリスト
の模範に従い、準備をする
ときであることを知ってい
ます。わたしたちが自分の
姿を映す鏡は、イエス・キ
リストをおいてほかにあり
ません。」

—ティトー・ギオバニ・
マシアス・ローブレス
(エクアドル、エルオロ、
マチャラ)



「家族で教会員はわたしだ
けです。あまり進歩してい
ないと思うこともあります
が、試しを受けることによ
って証が強められていま
す。わたしは神とイエス・
キリストが生きておられる
ことを知っています。わた
しがこのことを知っている
のは、御二方がわたしの祈
りにこたえてくださり、導
いてくださったからです。
わたしは孤独だと思ったこ
とはありません。ほんとう
に必要なとき、御二方は必
ずそばにいてくださるので
す。わたしは福音を愛して
います。また、教会員であ
ることをほんとうに幸せだ
と思っています。唯一まこ
との教会の会員であること
のすばらしさをいつか家族
全員で分かち合いたいと思
います。」

—リア・ヘベ・ペレイラ
(アルゼンチン、ブエノス
アイレス)



「イエス・キリストの福音
を受け入れることにより、
人の生活が大きく変わるこ
とを知りました。反抗的だ
った人が熱意あふれる生活
を送るようになります。わ
たしは人生の目的を知った
ことによって、自分がどこ
に向かって進むべきか分か
りました。新しい希望がわ
き、そして新しい生活が始
まりました。わたしはこの
教会の会員になる決心をし
て後悔したことは一度もあ
りません。」

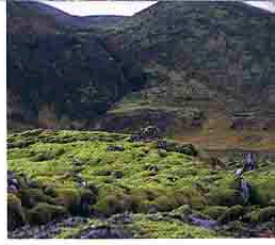
—メアリー・リー・ジョ
イ・シガーヨ
(フィリピン、ラグーナ、
ビニマス)

「イエス・キリストは完全な模範を示してくださいました。そしてこの完全な模範は永遠に変わり
ません。イエスは慎ましい家庭の子供としてこの世に生まれ、神の御子であったにもかかわらず、
地上の両親のもとで成長されたことをわたしは知っています。主はわたしたちが救いにあずかれ
るように多くの苦痛と苦しみを受けられました。イエスが創造主であったことを知っています。
また自分は生まれる前から約束を受けていたことを知っています。それは、わたしが主に信頼を
置いてふさわしい生活を地上で送るならば、神のもとへ戻ったときに再び主にお会いできるとい
う約束です。わたしは主にまみえる日を心の底から待ち望んでいます。そして、イエスと天父の
もとへ戻れるよう助けてくださったことに対し、御二方とお会いして直接感謝の言葉を伝えたい
と思います。」

—ブランカ・エステラ・ガルシア・アグーイラー
(エルサルバドル、ウースルータン・シティ) □



左ページ——アイスランドの首都レイキャビックには、色彩豊かな屋根の家々が立ち並び、曇り空の日でも町を明るくしてくれる。
右——美しい日没（左上）とこけのむす溶岩（右上）に特徴づけられる島、それがヨハネス（右下）のような末日聖徒イエス・キリスト教会の若人の住む国である。



火と氷の国

ジャネット・トーマス

ア イスランドという言葉をちょっと口にしてみてください。恐らく、そばで聞いている人はこう言うでしょう。「そこには以前から行きたいと思っていました。」そこで、どうしてそこへ行きたいのか尋ねてみましょう。きっと何かをあこがれるような目で、肩をすくめながらこう言うでしょう。「何となく、すごくおもしろそうだから。」

アイスランドは、単におもしろいという言葉では表現し難い国です。

電話帳の名前が姓名のうちの名で始まっている国がほかにあるでしょうか。火山で温められた戸外の池で泳げる国がほかにあるでしょうか。また、有名人、例えば大統領やトップミュージシャンが、だれからもわずらわされることなく町で自由に買い物のできる国がほかにあるでしょうか。

16歳になる末日聖徒イエス・キリスト教会の会員、ウルファーに聞けば、アイスランドに住むことのすばらしさがもっとよく分かります。アイスランドでは、夏の間、やりたいと思えば24時間野球を楽しむことができます。この国の夏は、数か月にわたって、空が完全に暗くならないからです。冬になると、ウルファーは友達と一緒にスキーをしたり、いちばん高そうな丘を見つけてはそりで滑り降りたりして遊びます。また、お父さんと一緒に自分たちに任されたアイスランド産子馬の面倒を見たりもします。また、給水塔に登って、レイキャビックの町や、色鮮やかな屋根を持ち、整然と並ぶ白い壁の家々を見下ろすこともあります。そして何よりもいちばんすばらしいのは、地の表にあるすべての国に福音が宣べ伝えられるというニューファイの預言を成就させるべく一致団

結して働く教会員のグループに自分が属しているということです（1ニューファイ14：12参照）。

アイスランドは北大西洋に位置する大きな島国です。アイスランドという地名から、氷と雪に覆われた荒涼たる大地を連想するかもしれませんが、実際には緑の多い国なのです。見渡すかぎりの溶岩とギザギザにとがった山々は、分厚い緑のカーペットのような地面で覆われています。触るとほんとうに、分厚く豪華で弾力性のある柔らかなカーペットのようなのです。しかし、そのようなカーペットの下にも危険が潜んでいます。道しるべのない道に踏み込んだ登山者が、地面を覆うこのこけのせいで、溶岩の間にある大きな割れ目に誤って落ちてしまうというのは有名な話です。

アイスランドは寒いというイメージがありますが、地面の下は煮立っていて、ドロドロに溶けた溶岩がぶくぶくと泡立つ大きな鍋状になっています。この島は文字どおり、山々の間に散在する巨大な氷河とともに、数多くの活火山の上に横たわっているのです。火と氷が接するとき、蒸気が発生します。ですからここでは、至る所に蒸気があふれています。どの家も蒸気で暖められて、適度な暖かさを保っています。また好きなだけシャワーを浴びられます。だれもお湯を全部使ってしまったからといって腹を立てる人がいないからです。

アイスランドは、海の中にぼつんと横たわっていて、近くにあるものと言えば大きな氷山ぐらいですが、それでもこの国の人々は、世界でどんなことが起こっているのか、いつも情報を収集しようとしています。教会がアイスランドに紹介されたのは、1851年のことです。二人の漁師が福音を聞き、バプテスマを受けたのです。この



左——伝道の召しを待つソルバーガーは、支部書記として働いている。ごつごつとして山の多いアイスランドの景観（右上）の一つに、氷河の溶けてできた川に源を発する滝がある。ハンナ（左下）は神殿に入ると、「まるで天国にいるようだった」と語っている。右ページ——ウルフアーは兄に倣って、伝道に出る計画を立てている。

二人の改宗者は、母国に戻ると福音を^の宣べ伝え始めました。アイスランドの初期の会員たちは、アメリカの初期の会員たちと同様、その信仰のゆえに迫害と苦難を受けました。政府がモルモン教徒のバプテスマを禁じる法令を通過させたことすらありました。結局のところ、ほとんどすべての教会員がアイスランドを離れ、アメリカに移住し、ユタ州のスパニッシュ・フォークに定住しました。その結果、アイスランドにおける伝道活動と教会活動は、60年間も中止されました。

しかし、20年前、船乗りだったソルステイン・ジョンソンが、バプテスマを受け、久し振りにアイスランド在住の教会員が生まれました。伝道活動が盛んになり、支部が一つ組織されました。

アイスランドに住む人々のほとんどはルーテル教会に属しています。首都であるレイキャビックでいちばん有名な目印になる建物と言えば、白くて大きなルーテル教会です。ちょうど通りの向こうに3階建ての建物がありますが、その中に末日聖徒イエス・キリスト教会の事務所と集会所があります。ここにアイスランドでいちばん大きな支部の会員が集っています。

毎週行われるセミナーに参加すると、レイキャビック支部の若人に会えます。数こそ少ないですが、互いにあつい友情のきずなで結ばれ、教会員としての標準のゆえに周囲から奇異な目で見られるときでも、友達同士励まし合っています。

ウルフアーは、おしゃべりが好きで、授業中にいすを傾けながら座る典型的な10代の少年です。彼は自分たちのバスケットボールチームがトーナメントに招待されたことについて話してくれました。ウルフアーは、実は自分の母親でもあるセミナーの教師が大好きです。

ヨハンネスには、まじめでおとなしい性格ながら、明るく輝くような証^{あかし}があります。彼と彼の家族（兄のソルバーガーと両親）はレイキャビック支部の古い会員です。

3人の若い女性がコースを終了しました。かわいい目と長い黒髪のメラニー、美しい金髪のエルーン、波打つ

ショートカットと笑顔のかわいいハンナです。3人は大の仲良しで、お互いを姓名の名の方で呼び合っています。

実は、この国の国民全体が、お互いを姓名のうちの名で呼ぶのです。アイスランドでは名前でだれかが分かるようになっています。名字は古来の方法に従い、男女ともに父親の名前にちなんで付けられます。ウルフアーの父親の名前は、グードマンダー・シーガードソンといいますが、ウルフアー自身の名字はグードマンドソン、妹の名字はグードマンズドッターといいますが、ウルフアーの母親は、名前をバーラーといいますが、父親の名前がカーヌートであることからカーヌトスドッターという名字になります。ややこしいでしょう。だから大人でもだれでも、名前で呼び合うことになっているのです。

ウルフアーの母親が、家族で初めて宣教師に会ったときの話をしてくれました。「わたしは二人の宣教師にわたしの息子の名前はウルフアー・カウリーです、と言いました。すると、彼らはいささか当惑したような顔つきをしました。」バーラーはこう語ってくれました。ウルフアーの名前は大きな声で発音すると、「オリバー・カウドリー」と言っているように聞こえるのです。宣教師たちはどうしてアイスランドに住む家族が、息子に教会の歴史上有名な人物にちなんだ名前を付けたのか理解できませんでした。

アイスランドで10代の時期を送るのは、ほかの国と同じ理由で、なかなか大変なことです。現代の世の中では、どのような人生を自分が送りたいかということに関連して、いろいろな決断を下さなければならないからです。ウルフアーはこう語ってくれました。「10代というのは大変な時期です。『おい、一緒に飲もうよ。たばこ1本どうぞだい』って、みんなが言うんです。友達もお酒を飲みに行きます。ほくも何度か誘われましたが、いつも断ったり話題をそらしたりしているうちに、今ではだれも構わなくなりました。」

パーティーなどで、ほかのグループから孤立してしまうのはつまらなくないかという質問に、メラニーがこう





左ページ—ヨハネス、メラニー、エルーン。ハンナ、バイキングの船の彫刻とともに。右—アイスランドの虹（左上）も、メラニー（右上）やエルーン（右下）のような末日聖徒の若人の生活に見られる福音の光に勝ることはない。



答えてくれました。「お酒の出るパーティーには出たくありません。誘ってくれなくても別に何とも思いません。なぜって、そういう所にとにかく行きたくないからです。あるとき学校でパーティーがありましたが、わたしは出席しませんでした。そのパーティーの目的がお酒を飲んで酔っ払うことだと分かったからです。次の日になって、なぜパーティーに来なかったのかと聞かれましたが、行きたくなかったからとだけ答えました。」

教会の若人は教会からどのような助けを受けているのでしょうか。メラニーは若い女性の集会からたくさんの助けを受けていると語ってくれました。「若い女性の集会では、1週間に、いろいろな活動が行われます。この集会を通して知り合い、友達になるきっかけができます。それがわたしにとって支えとなり、喜びとなっています。ほんとうの友達がいるというのは、素晴らしいことです。」

ウルファーは神権の力についても語ってくれました。小さいときにその力を感じる機会がありました。バプテスマの後で、父親と支部長会の兄弟たちが、その手を自分の頭の上に置いて確認の儀式を行ってくれたときのことです。家に帰って母親のそばに座ると、母親の方に向き直ってこう言いました。「すごいんだよ。お父さんたちってほんとうに力があるんだ。頭のてっぺんから足のつま先まで、力が流れて行くのを感じたんだよ。」

ウルファーは自分の父親と、最近専任宣教師として働いてイギリスのバーミンガムから帰還した兄が示してくれる神権者としての模範に従っています。「ぼくは兄から規則をどのように守っていけばよいかということについて学びました。兄はいつも信念をもって規則を守る人でした。」

教会の若人には、教会のことについて友達に教えるという責任があります。基本的なことから教えなければならぬのです。ヨハネスはこう語っています。「友達から教会のことについていろいろな質問を受けます。例えばモルモン教会もキリスト教の一つかといった質問です。」

昨年、支部の歴史始まって以来初めての神殿訪問が行われました。いちばん近い神殿がロンドン神殿になるので、神殿訪問はとてつもなく大きな企画でした。費用がかさむので、つい最近までアイスランド人で神殿の儀式にあずかれる人はいなかったくらいなのです。

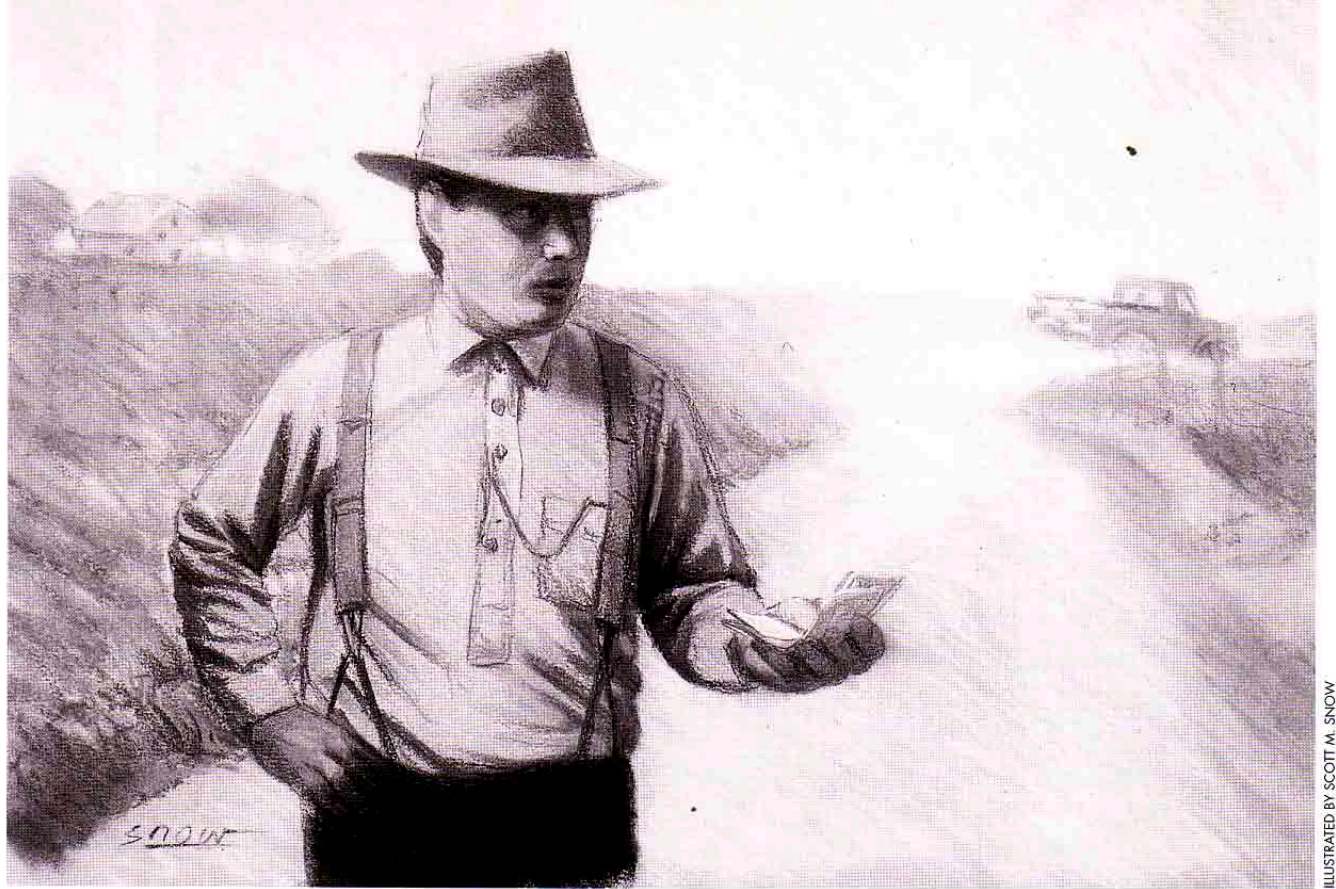
ハンナは神殿での経験について話してくれました。「皆親切で温かい人ばかりでした。天国にいるようでした。こんな気持ちをいつも感じていたいと思いました。」

神殿滞在中に、アイスランドの若人は毎朝、そして午後の2回、死者のために身代わりのバプテスマを受けました。読み上げられた名前は、自分たちの先祖の名前でした。メラニーは自分が身代わりにバプテスマを受けている人たちのことを考えずにはられませんでした。「この人たちは喜んでくれているかしら。わたしが今ここでしていることを受け入れ、感謝してくれるかしら。それはただの名前ではありませんでした。かつてこの地上で家族を持ち、実際に生活していた人たちだったのです。」

神殿訪問から帰ってからも、そのときに培った深い友情は続いています。この10代の若人たちは自分たちの国と教会が大好きです。このところ、^{せいさん}聖餐会の時間になると、集会所は人であふれています。会員にとって、これは大きな喜びです。福音のメッセージが国中にあたかも光のように広がっているのです。

ノーザン・ライトのことについて聞いたことがあるでしょうか。毎年、秋から冬にかけて、アイスランドの空一面がノーザン・ライトで照らされます。アイスランドの夜空を緑色、紫色の光が輝き照らすのです。時には、あまりにも鮮やかな光のために、人々が皆立ち止まってしばらくの間見入ってしまうほどです。

レイキャビックの若人も、ある意味でノーザン・ライトのようなものかもしれません。彼らは、自信と信仰を胸に友達や家族と接しています。若人にできる最善の模範を示しているのです。時には、しばらく立ち止まって、そんな彼らの行動を観察したくなります。ほんとうに素晴らしい若者たちなのです。□



ILLUSTRATED BY SCOTT M. SNOW

まず^{じゅうぶん}什分の一を

オズボーン・N・スミス

「什分の一の支払いと、農地の支払いのどちらを先にすべきか。」1920年に、わたしの父、ヘンリー・L・スミスはこの難しい選択に迫られていました。

ニューメキシコ州バーデンの地に、末日聖徒の小さな社会を築いたほかの人たちと同様に、わたしの両親も主を頼る勤勉な人たちでした。しかし経済的に豊かではありませんでした。1年間かけて得られるたものと言えば、たいていは穀物2,3袋だけでした。

日夜祈り、勤勉に働いた結果、1920年に小麦が豊作となりました。ところが、小麦の需要は少なく、その売値も安価でした。家族は、物々交換で食べる物は十分がありました。やがて抵当の支払い期日が迫ってきました。共同で農地を購入したすべての家族が、期日までに支払いを済ませておくことは重要でした。そうでないと、全員の土地を取り上げられてしまう危険性があったのです。

たいていの農夫と同様、わたしの両親も什分の一の支払いをするためには収穫の時期まで待たなければなりませんでした。不幸にも、両親が支払えるのは、什分の一か農地の代金のどちらかで、両方支払うのは不可能なことが分かりました。父は販売できる幾つかの小麦袋を持

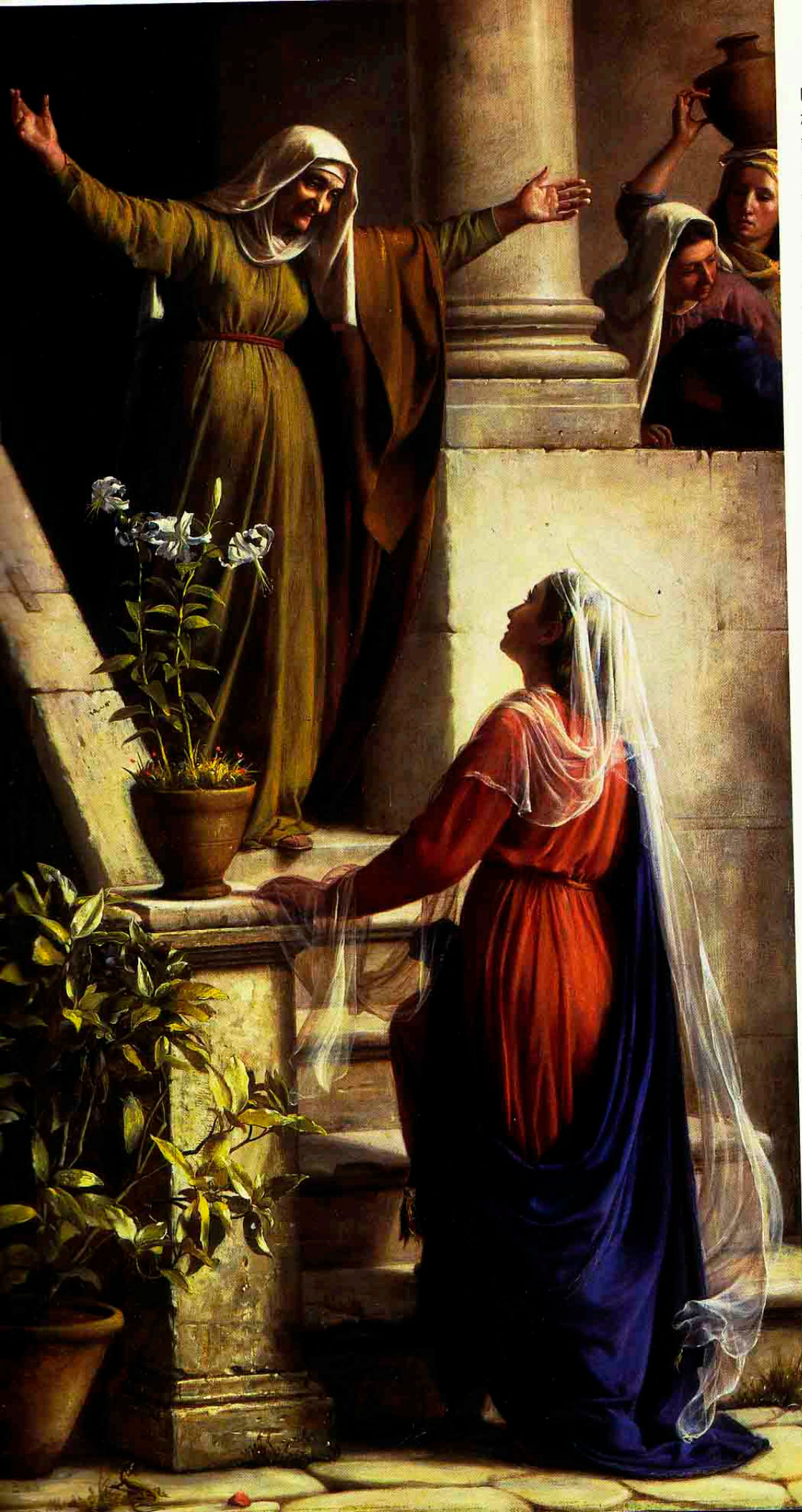
っていましたが、それを購入したいと思ってくれる人がいませんでした。

父の日記には次のように書かれてありました。「当然什分の一を支払わなければならないと感じたが、農地の支払いも無視できないと思った。わたしたちは主に頼り、主の前に自分たちの問題を打ち明けた。すると、まず什分の一を支払うべきだ、と強く感じたのである。」

什分の一を支払ってから数日後の父の日記には、「今まで会ったこともない男性がやって来て小麦全部を高い値段で買ってくれた。ついに農地の支払いに必要なお金を得られた」とありました。

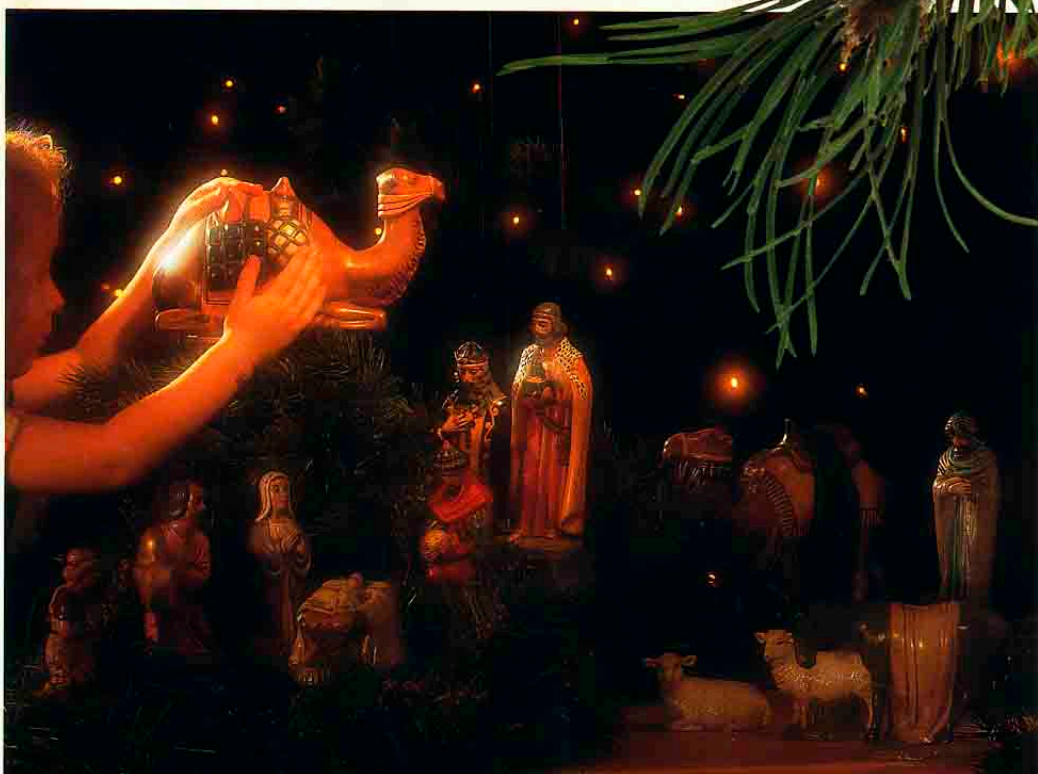
その男性がどこからやって来て、どこへ去って行ったかは父にはまったく分かりませんでした。また、なぜあんなに高い値段で喜んで小麦を買ってくれたのかも理解できませんでした。ただ父の日記には次のように記録されているだけです。「わたしたちが主に頼り、忠実であるときに、主はわたしたち家族を養ってくださると感じた。」

主はほんとうに天の窓を開いてくださり、わたしたち家族にあふれる恵みを注いでくださったのです。□



「たくさんの祝福を与えてく
ださる主に心から感謝してい
ます。主は、腕やよく見える
目、歌うことのできる声、家
庭、愛し、仕え、生きる機会
を与えてくださいました。神
を信じるのはすばらしいこと
です。わたしには、ほしいも
のなどほとんどありません。
でも感謝すべきことは山ほど
あります。」

——パトリシア・エリザベ
ス・バエズ・コラル
(エクアドル, エルエジド)
(「小羊は生きておられる」
p.34参照)



主の降誕の置物とクリスマス
のオーナメントは、救い主につ
いて思い起こさせてく
れる象徴である。イザ
ヤは主について次のよ
うに預言している。
「ひとりのみどりごが
われわれのために^{うま}生れ
た、ひとりの男の子が
われわれに与えられ
た。まつりごとはその
肩にあり、その名は、
『靈妙なる議士、大能
の神、とこしえの父、
平和の君』ととなえら
れる。」（イザヤ9：6）





サントドミンゴ神殿の鍬入れ式で最初に鍬入れをするリチャード・G・スコット長老（中央）、F・バートン・ハワード長老（右）、デール・E・ミラー長老

サントドミンゴ神殿の 鍬入れ式

——ドミニカ、ハイチ、プエルトリコから
6,000人が参列——

サントドミンゴ
(西インド諸島、ドミニカ共和国)

8月17日から18日にかけての週末、ドミニカ共和国の人々は、レオネル・フェルナンデス氏の新政府大統領への就任を祝った。この週末は、ドミニカの末日聖徒だけでなく、ハイチやプエルトリコの末日聖徒にとっても、特に重要な日となった。待ちに待ったサントドミンゴ神殿の鍬入れ式が8月18日に行われたからである。

鍬入れ式を管理したのは、十二使徒定員会のリチャード・G・スコット長老である。また北アメリカ南東地域会

長会会長で七十人のF・バートン・ハワード長老、および地域幹部であるデール・E・ミラー長老も出席した。

式には、教会員、宣教師、教会員でない来賓など、推定6,000人が参列した。サントドミンゴの中心街から程近い、緑に囲まれた神殿の敷地に早く到着できるように、何時間もかけて来た人も多かった。

スコット長老は式辞の中で、神殿はとても特別な建物であり、家族が永遠の家族となるために、天父と聖約を交

わす場所であることを説明した。そして、新しい建物が奉獻されてからは常に神殿推薦状を保持できるにふさわしい生活を送るよう、教会員にチャレンジした。また聖徒らが心を尽くして主に仕え、受けている祝福を心に留め、感謝するように勧告した。

ハワード長老は神殿の目的について説明し、「もし来世で、家族が離ればなれになってしまったらどんなに悲しいことでしょう」と語った。また会衆に、神殿の目的は、家族や愛する者たちが永遠とともに住めるようにすることであり、神の神殿で行われる儀式があって初めてそれが可能になる、と告げた後、これらの儀式は救い主のわたしたちへの愛の大いなる表れである、と述べた。

ミラー長老は、神殿はカリブ海の宝となり、学びの家となるであろう、と述べた。そして常に神の前にあって清くあるよう、聖徒らにチャレンジした。

奉獻の祈りの中で、スコット長老はこの地が悪の影響、そして自然災害から守られるように祝福した。また、この建物の建築に携わる人すべてが、喜びの精神を感じられ、身の危険から守られるように祝福した。さらに、新たに就任したこの国の大統領と、大統領の下で働く人々に祝福があるように、また彼らの働きが国民に益をもたらすように祈り求めた。

フェルナンデス大統領の代行で、新政府の技術庁書記官でもある、建築家のエドアルド・セラマン氏は、ステーキ会長やほかの来賓とともに、進んでシャベルを手にし、^{くわい} 鍬入れの儀式に加わった。神殿に加え、訪問者センターおよび神殿長の住居が、美しいカリブ海を見渡せるこの敷地に建設される予定である。

当日鍬入れ式の前に、スコット長老とハワード長老はサントドミンゴ東伝道部、サントドミンゴ西伝道部、およびサンティアゴ伝道部から集まった約600人の宣教師らとの集会を持った。(この記事は、F・バートン・ハワード長老とダリオ・カミネロ兄弟からの報告に基づいて書かれた。) □

エクアドル神殿の 鍬入れ式

——「鍬入れ式に参列した人は、
皆涙を流しました」——
エクアドル共和国、グアヤキル(南アメリカ)

神 殿は、「確かに来世があることを示す、目に見える証拠です。」8月10日、エクアドル・グアヤキル神殿の鍬入れ式が行われ、式を管理した十二使徒のリチャード・G・スコット長老はそう語った。

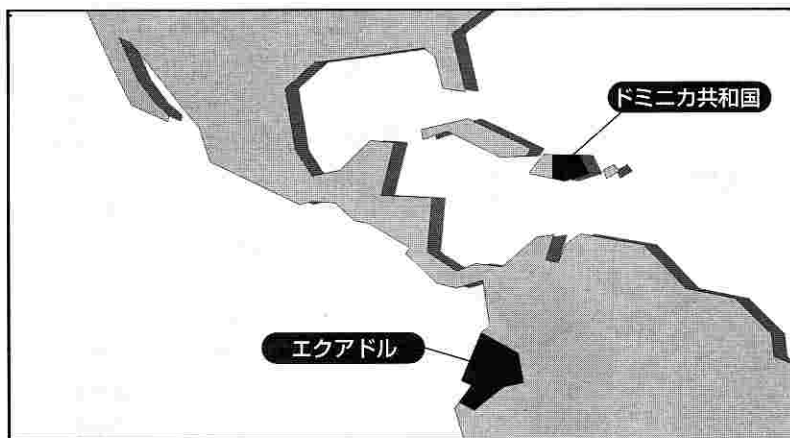
敷地での式には、ステーキ会長夫妻とわずかな来賓しか参列できなかったにもかかわらず、10,446人もの人々が近くのグアヤキル・コロシウムに集まり、地元のラジオを通じて式の模様を耳を傾けた。遠くの町からバスに12時間も乗って出席したステーキ会長も何人かいた。

スコット長老のほか、七十人および教会の南アメリカ北地域会長のジェイ・E・ジェンセン長老、ならびに同じく七十人で地域会長会第一副会長のフリオ・E・ダビラ長老も参列した。ジェンセン長老が式の司会を務め、ダビラ長老が式辞を述べた。開会の祈りをささげたのは、地域幹部およびグアヤキル神殿委員会副委員長のウォルター・F・ゴンザレス長老であった。そして元地区代表で神殿オープンハウスの実行委員を務めているギエルモ・グランハ兄弟が閉会の祈りをささげた。

スコット長老は、神殿の中では「息子、娘たちがわたしたちに永遠に結び固められます。生きている人たちのためだけにこのような素晴らしい偉大な御業が行われるのではなく、身代わりの儀式を通じて、現世で福音のもたらす祝福を享受できなかった先祖のためにも、同様の儀式が執行できるのです。」

またスコット長老は、会員すべてにこう語った。「神殿に参入できるように霊的に備えてください。神殿が建設されている期間は、先祖を探求するための時間として用いてください。先祖の名前を提出するうえでの指示は、皆さんのワードや支部で難く得られるでしょう。やがて神殿がこのグアヤキルで奉獻されたとき、皆さんはそこに参入して先祖のために奉仕できるのです。」

また次のようにも語った。「特別な経験をもとに、神殿で行われる儀式の有効性について証を述べたいと思います。わたしは子供を二人亡くしていますが、彼らがわたしたち夫婦と結び固められているということを知っているので、大きな慰めを得ています。また



妻も先立ってしまい、幕の向こうにいます。しかし妻は今でも生きていて、わたしが忠実で正しければ、神のみもとでともに暮らす特権にあずかれるという確信があるので、とても慰まられています。」

スコット長老は、神殿の建設が終了してから奉献されるまでの間にオープンハウスがあり、「エクアドル市民すべてが」神殿の中に入れることを、集った聖徒らに思い起こさせた。

ジェンセン長老はこう述べている。「鍬入れ式に参列した人は、皆涙を流しました。わたしたちは、常々『いつかこの地にも神殿が立つ、いつか、いつの日にか』と言ってきましたが、鍬入れ式によって、漠然としていたものが、現実のものになったのです。」

ダビラ長老は、ジョセフ・スミスやブリガム・ヤングなど、回復された福音における開拓者たちに賛辞を贈った後、過去30年間のエクアドルにおける開拓者へも賛辞を述べた。「彼らは犠牲を払い、自らをささげ、信仰を持ち続けました。ステーク会長、支部長、伝道部長をはじめ、大勢の人々が、この日を迎えるために様々な機会を通じて熱心に働いてきました。」

また、ダビラ長老は次のように述べた。世界中には救い主により近づこう



クリスチャン・モンカヨ少年が鍬入れするのを手伝う、十二使徒定員会のリチャード・G・スコット長老（中央）と七十人のジェイ・E・ジェンセン長老（左）

と、聖地を訪れる人が多くいるが「わたしにとっては、神殿に参入して、イエスが歩まれたところを歩む方が、はるかに祝福を受けるように思われます。……イエスが歩まれた道をわたしたちも歩みだすよう、心から願っています。キリストが^{あかし}この地を訪れられたことを証します。……わたしたちの先祖はこの神殿の近くに住んでいました。ニーファイやモロナイをはじめとするリーハイの子孫の霊を感じられるような気がします。彼らもまた、アブラハムの子孫であり、天父の子供たち

なのです。」

そして1977年にスペンサー・W・キンボール大管長が啓示を受けて語った、次の声明を引用した。「数多くのわたしたちの子孫が神殿に参入し……わたしたちや先祖のための業を行ってくれることでしょう。」

グアヤキル神殿の計画は、14年前の1982年3月に、当時スペンサー・W・キンボール大管長の副管長であったゴードン・B・ヒンクレー大管長によって発表された。□

トンガの王室、大管長会と会見

——人口10万人のうち約4万人が末日聖徒——

トンガの国王タウファハウ・ツボウ4世は、環境保護に尽くした功績をたたえられ、ユタ州のある機関から表彰されることとなり、それに先立つ8月2日、教会管理本部ビルで大

管長会と会見した。

ゴードン・B・ヒンクレー大管長とトーマス・S・モンソン第一副管長は、北館幹部室で太平洋の島からやって来た訪問客を迎えた。国王一行には、

ハラエバル・マターホ王妃、ピロレブ・テュイタ王女、メレ・ステュイリクタブ・カラニウバル・フォトフィリ王女、シオサイア・M・テュイタ総領事が加わっていた。

会見には、十二使徒定員会会員ジョセフ・B・ワースリン長老と、七十人定員会会員アレクサンダー・B・モリソン長老、教会ホストのメアリー・エレン・スムートも出席した。

スムート姉妹によると、会見中、ヒンクレー大管長は、国王がトンガの人

人のために尽くしておられることに対して感謝を述べた。トンガに住んでいる10万人のうち約4万人は教会員である。カラニウバル・フォトフィリ王女は、「王室一家にとっても家族はとても重要です。ですから教会が家族を大切にしていることを王室の皆は称賛しているのです」と述べた。

国王一家は大管長会と会見した後、

ジョセフ・スミス記念館での昼食会に出席した。昼食会には、ワースリン長老夫妻、モリソン長老、ブルース・C・ヘーフェン長老夫妻が出席した。

昼食会の終わりにトンガ国王は、ユタ州スプリングビルに本拠を置く海洋生態学財団から「原産種動植物保護における本年度最優秀功労賞」を受賞した。この環境保護財団は、オオコウモ

りの保護に国王が尽力したことに対して感謝を表明した。この動物は、南太平洋諸島の熱帯雨林で受粉や種をまく役目をするコウモリの一種である。また、国王はコウモリの禁猟保護区を作ることにも寄与した。(Church News『チャーチニュース』1996年8月10日付け)

祈りは明確な礼拝行為です

●『モルモン書』からの聖文を応用するために

七十人第一定員会会員のデビッド・E・ソレンセン長老は、1993年4月の総大会で次のように述べました。「救い主は『モルモン書』の中で祈りを強調され、ニーファイ人のために、親しく彼らとともに何度も祈られました。そのようにされた後で、御自分の模範に従うように言われました。

『まことに、まことに、わたしはあなたがたに言う。あなたがたは悪魔に誘惑されないように、また悪魔に捕らえられないように、常に目を覚ましていて祈らなくてはならない。

わたしがあなたがたの中で祈ったように、あなたがたもわたしの教会で、悔い改めてわたしの名によってバプテスマを受けるわたしの民の中で祈りなさい。見よ、わたしは光である。わたしはあなたがたのために模範を示した。』(3ニーファイ18:15-16。3ニーファイ18:24; 19:17-34; 27:21も参照)

キリストは、実に少なくとも10回、「わたしの名によって……父に祈らなければならない」とニーファイ人にはっきりと勧めていらっしやいます(3ニーファイ18:19。3ニーファイ13:6-9; 14:11; 17:3; 18:20-21, 23; 20:31; 21:27; 27:2-7, 9, 28も参照)。

キリストの教えによれば、祈りは完成に向かうどの段階でも必要です。特

に初期の段階はそうです。例えばキリストは、福音が回復されたおまな理由の一つは散乱したイスラエルが、キリストの御名によって御父に祈れるようになるためであると言われました。

『まことに父は、わたしの民のすべての散らされた者がわたしのもとに来て、わたしの名によって父にお願いすることができるように、道を備えるために彼らの中でその業を始められる。』(3ニーファイ21:27, 下線付加)

さらに主は、求道者のために教会の中で祈るように言われ(3ニーファイ18:23-30参照)、御言葉を聞いた人々はそれについて深く考え、理解を深められるように御父に祈るよう言われました(3ニーファイ17:3参照)。そして、主御自身のように完成された人でさえ、絶えざる祈りが必要であることを示されたのです。

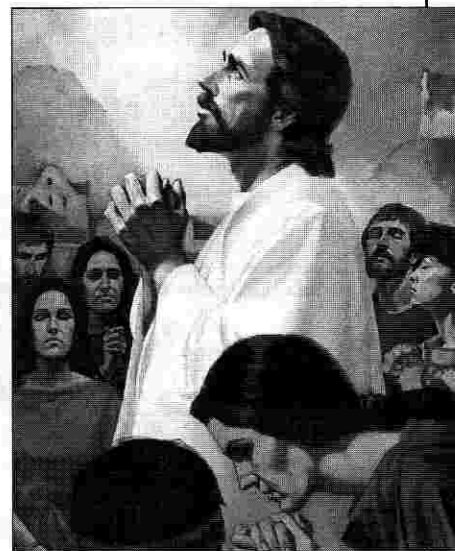
天父のように成長するためのどの段階でも、祈りは必要です。ひとたび神の恵みを味わったら、頻りに祈るようにキリストは教えていらっしやいます。隠れた所で、家庭で、教会で、心の中で、必要な事柄を絶えず具体的に求めるように言われました。「与えられると信じて、わたしの名によって父に求めるものは、正当であれば、見よ、何でもあなたがたに与えられる。』(3ニーファイ18:20)

祈りは単に天父の恵みを得るだけの手段ではないことを、キリストはニー

ファイ人に教えられました。祈りは正義の行為であり、信仰の行いです。また、父なる神と御子イエス・キリストに対する明確な礼拝行為なのです。『聖書辞典』[英文]にはこう記されています。「祈りの目的は、神の御心を変えないことではない。神がすでに用意しておられる祝福を自分と人のために授かることである。しかし、それらは求めなければ与えられない。」(p.753)

つまり、祈りを通してわたしたちの望みと天父の御心が一つになり、求める祝福と天父との一致というもう一つの祝福が得られるのです。男女を問わず、個人としての、また集団としての救いは、このような祈りにかかっています。』

ゲリー・アバント編、参考文献：『聖徒の道』1993年7月号 (Church News『チャーチニュース』1996年9月7日付け, p.14)



ニーファイ人とともに祈るイエス

会員参加による 集会所美化プログラム始まる

管理本部施設管理課

教会の美化に多大な関心を寄せている地域会長会は、以下のような手紙を神権指導者あてに送付し、集会所美化プログラムについて会員の積極的な参加を促した。

ユニットの士気を高め、 自助の精神を促すプログラム

「教会が有給の管理人を雇い始める前は、ワードや集会所に集う会員たちが、主の家のすべての保守、清掃作業を敬虔な気持ちで行っていました。ところがそれ以降は、清掃作業への協力に対する一部の聖徒たちの関心が薄れ始め、同時に自助の精神と勤勉という末日聖徒の美德の幾つかも影を潜めるようになってきました。

……集会所を使用する会員たちが定期的に奉仕して、会員たちにできる部分や、またそうすべき部分を清掃すれば、清掃担当者はもっと効果的な働きができます。会員や指導者たちが主の家の使用後の状態をまったく顧みず、清掃担当者が各集会所の後片付けさえも行うように求められれば、彼らの士気は逆に低下してしまいます。

ワードや支部で、天父の集会所の使用法をきちんと会員たちに教えることにより、建物を自分たちの住まいのように、敬虔な思いをもって、天父に喜んでいただけるような方法で維持管理することができるようになります。さらにユニットの会員たちが一致協力して主の業のために働くとき、ユニット全体の士気は高まり、参加する会員たちの間には、親密な結びつきが生まれるでしょう。」(1996年6月28日付け「会員の働きによる集会所の美化活動」より)

この手紙に添付された一連の資料により、集会所美化プログラムの概要が

発表され、今年7月から幾つかのステーク/地方部で会員奉仕による清掃と補修作業のプログラムがスタートした。

熊本地方部センターを皮切りに 8週間のプログラムを実施

これらのユニットでは、ステーク/地方部センターを美化のモデルケースとし、美しさの標準とするために、教会管理本部から予算面と技術指導について援助を受け、各ステーク大会/地方部大会を目標としたスケジュールを作成した。その8週間にわたるプログラムの第一弾として、熊本地方部センターである熊本・長嶺支部の建物において、9月8日に予定された地方部大会に向けて、7月中旬の事前検査からプログラムが開始された。

8月3日(土)に行われた地元指導者と管理本部との調整集会には、地方部長会、両支部長をはじめ補助組織の会長など約20人の参加者があり、スケジュール説明に続き実施に向けての質疑応答が行われた。

日程の都合で地方部大会の直前、9月第1週に行われた清掃作業の集中実施

では、昼夜を問わず積極的な会員参加があり、兄弟姉妹によって以下のような様々な清掃作業が行われた。

9月3日(火)昼—入れ替わりで常時5、6人の参加。廊下壁ペンキ塗装準備、外周片付け、草取り、植木剪定、窓ふきなど。

夜—両地方部長、支部長、総合施設代表者を含め20人の参加。カーベットのしみ抜きとクリーニングの講習など。

9月4日(水)昼—入れ替わりで約10人の参加。廊下ペンキ塗装養生と塗装、パイプす磨き、舞台カーテンのほつれ縫製修理、カーペットクリーニングなど。

夜—18人の参加。ドア周りペンキ塗装、窓ふき、カーテン取り付けなど。

9月5日(木)昼—平均10人の参加。草取り、ごみ分別とごみ出し、ペンキ養生撤去、2階床タイルワックスかけ、業者による幅木取り付けなど。

金曜日以降も同様の会員奉仕が見られ、土曜日の午前中に最終の仕上げとして全体の清掃を行い、当日夕方からの地方部大会の部会に備えた。

自分たちの集会所を主の目にかなうものにしてしようという会員の熱心さは日を見張るものがあり、まだ真夏の暑さが残る日中にも草取りや外回りの片付けなどが積極的に行われた。中でも、支部長自ら2日間ほど休暇を取って参加し、どぶ掃除を買って出たり、よく割り当てされた兄弟姉妹たちにより、

集会所美化プログラム

第1週	事前検査	業者による見積もり
第2週	関係者連絡調整	業者による見積もり
第3週	地元指導者との調整集会	予算承認
第4週	第4、5、6週の聖餐会で発表 地元でできるところから実施	業者による補修/修理工事
第5週	第4週の成果を報告 会員の参加を促す	業者による補修/修理工事
第6週	第4、5週の成果を報告 第7週の集中実施について発表。参加を促す	業者による補修/修理工事
第7週	集会所美化プログラムの集中実施	
第8週	神権指導者と管理本部職員による確認、評価	

時間の使い方も含めて、整然と効果的な作業が進められた。

本部からの担当者に加え、福岡、鹿児島から応援に駆けつけた二人のフルタイム清掃担当者も、会員たちの熱意にこたえ、インストラクターとしてペンキ塗装や機器類の調整などの技術的・専門的な指導をよく行った。特筆すべきは、どの作業をとっても、終始和気あいあいとした楽しい雰囲気の中で行われたことである。

会員の積極的な参加で意識の高揚を図る

今回のプログラムについて、^{すみや}角屋地方部長は次のような感想を述べた。「ペンキ塗りやワックスがけなどを含めて、支部長の指導の下、会員が積極的に清掃作業に参加することで、意識が非常に高まったと思います。まずまず成功と言えるのではないのでしょうか。今後も、パートタイムの清掃担当者任せにせず、定期的に会員が清掃作業に参加し、建物の維持管理に努めたいと思います。」

また、地方部大会に出席した地域会長会のデビッド・E・ソレンセン会長も、大会で教会堂の美しさに触れ、会員の努力をたたえた。

その後、9月以降今年度中のスケジュールとして、札幌ステーク、東京北ステーク、名古屋ステーク、高崎ステーク、石川地方部が予定され、順調にプログラムが消化されている。

またこのプログラムでは、清掃作業のほかに業者によるある程度の補修を伴う予算的な制約と、管理本部からの人的な援助の必要から、便宜上、ステーク/地方部単位で日程が組まれることとなったが、各ワード/支部でも同様の奉仕プログラムが計画され、進められている。

「〔教会の〕施設が修理と清掃の行き届いた状態で適切に管理されていれば、霊的成長や健全な活動の機会がさらに充実するであろう」との大管長会の言葉のとおり、教会堂を美しく保とうとする今回の試みによって、会員相互の自立心が高まり、喜びが増し、伝道活動をはじめとする様々な活動の礎となることを願ってやまない。□



教会堂の保守、清掃作業を行う熊本・長瀬支部の会員たち



ヒーバー・J・グラント長老が 奉献された地に立って

日本伝道95周年を記念しての祈り会

横浜ステーク

横 浜ステークでは9月1日、安息日の早朝7時半、横浜市中区岸根台にある根岸森林公園（JR根岸線根岸駅下車徒歩10分）にて、日本伝道95周年を記念しての祈り会を行いました。

この会は、1901年9月1日、ヒーバー・J・グラント長老が「鷺山」の丘で日本伝道のために奉献の祈りをささげたことにちなんだものです。当時、グラント長老一行は「鷺山」の林に囲まれた斜面で記念写真を撮っていますが、現在は閑静な住宅地になっていて、その場所を特定することはできません。しかし、この「鷺山」地区から西に1キロと離れていない所に、当時をしのばせる美しい森林公園があります。15年前、七十人第一定員会会員である菊地良彦長老は、この根岸森林公園で日本の地を再び奉献し、伝道の飛躍につながる新たな祈りをささげました。

すがすがしい空気と朝日のさす聖なる森の祈り会には、約80人の兄弟姉妹が集いました。95年前と同じ「感謝を神に捧げん」（『賛美歌』11番）を歌って開会し、宮内、野田両ステーク副会

長、渡辺ステーク伝道部長の話の後、わたし沼野が当時のグラント長老の祈りをアルマー・O・テラー長老の日記から朗読しました。その後、東京南伝道部のスティーブン・K・ランドル部長は、「28年前のわたしの最初の伝道地だった横浜の地に再び立って、特別な御霊を感じます」と話され、続いて遠藤大ステーク会長、広報宣教師の池上長老から話を伺いました。

集った人々は、日本の地がこの95年間、大いなる祝福を受け、主に導かれてきたこと、これからも信仰堅固に進むための希望を心に強く感じました。最後に「いざ救いの日を楽しまん」（『賛美歌』5番）を歌い、主を賛美しました。

それぞれの集会場へ向かう帰り道、雨が降り始めたのですが、それまで主は雨を天にとどめおいてくださったのでした。グラント長老たちの霊が、しばしわたしたちとともに、その場にとどまっていたことをはっきり知りました。（レポーター：沼野範実、ステーク幹部書記）



ヒーバー・J・グラント長老が九年前に奉献の祈りをささげた地に立って祈り会を行った横浜ステークの会員

「試合の朝は、いつも 父が祝福をしてくれました」

——「最後まで堪え忍ぶ」ことの大切さ——

東京東ステーク鎌ヶ谷ワード
三浦礼久

ぼくは、小学校、中学校、高校と10年間野球を続けました。始めたきっかけは、二人の兄が野球をしていたからです。ぼくもやりたいからと言うと両親が許してくれました。その代わり、祈ること、聖典を読むこと、教会に行ける日は必ず行くことなど教会員であることを忘れないという約束をしました。

やりたいと思って始めた野球ですが、高校3年間の野球部の生活はほんとうにつらく、何でこんなことを選んだんだろうと思うことがたくさんありました。でも、すべてが終わった今振り返ってみると、部活の経験は貴重なものだったと思います。

高校1年の数か月は声出しばかりで、声が小さいとどなられ、大きい声を出しても声がかれていないと言ってどなられました。入部して1か月もしないうちに、16人いた部員が半分以下の7人になってしまいました。ぼくもこんなことをしていて何になるんだろうと思ひ、やめてしまおうと思いましたが、やめていく皆の流れに乗れず、やめられませんでした。7人全員でやめようとしたこともありましたが、皆が野球が好きだったので、とりあえず今日1日頑張ろうと励まし合ってきました。

練習の用意、グラウンドの整備は1年生の仕事でしたが、それを7人だけでやるのはほんとうにきついものがありました。また、6月には合宿があり、授業が終わってから夜の10時ごろまで練習しました。そのあとで先輩の自主練習の手伝い、グラウンドの整備、先輩のユニフォームの洗濯など、すべて終わるのが夜中の3時を過ぎていました。翌朝5時30分には練習が始まるので、寝る時間は2時間程度しかありませんでした。少しもたもたしている

寝る時間がなくなることも何回かありました。

ほとくのクラスは部活をしている人は少なく、皆進学のために一生懸命勉強していました。ぼくも授業中は寝ないように気をつけていましたが、合宿のときはつらく、知らないうちに寝てしまったこともありました。気がつくとなら2、3時間たっていて、先生が変わっていたということも何度かありました。授業が終わってすぐ帰る友達を見てうらやましく思っていました。勉強の面で、ぼくだけ取り残されてはいけないと焦る気持ちがありました。このまま部活を続けて受験はどうなるかと思ひ、時間をうまく使って勉強する方法を考えました。特に授業中は先生の話に集中するように頑張りました。

両親は、高校生なんだから野球と勉強を両立させるように、また、神様の子であることを忘れないで聖典を読むように何度も言いました。野球を許してもらおうと両親とした約束は、絶対に守らねばという気持ちがありました。また教会に行けないぼくを心配してくれた宣教師との約束もあって、聖典は毎日読むように努力しました。

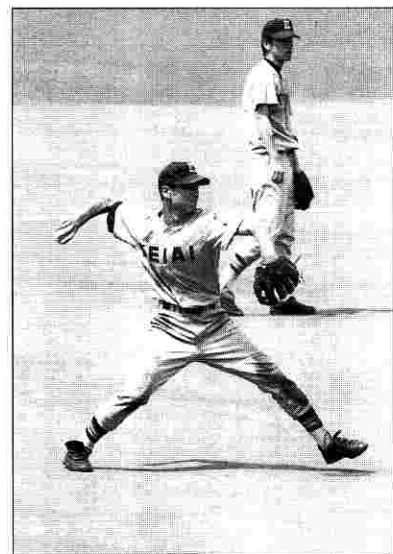
2年生になり後輩が入ってきました。これできつい仕事から解放されると思ひ、すごくうれしくなりました。ぼくたちもいろいろこき使われたという思ひがあったので、後輩をこき使っていたら1年生をこき使っているといつてしかられました。そして、練習の用意、グラウンドの整備は1年生と一緒にやることになりました。ぼくたち7人は、もっとひどい扱いを受けたのにと悔しい思ひをしましたが、7人で励まし合って頑張りました。

最上級生になり、試合に出られるようになりました。しかし、ぼくはまったくといってよいほど打てませんでした。監督は後輩ばかり教えて、ぼくたちにはほとんど教えてくれないように

思えました。監督に見放されているように感じ、つらく情けない思ひをしていました。でもこれではいけないと思ひ、練習が終わった後で友達とバットを振ったり、ノックを打ち合ったりする自主練習を始めました。しかし練習試合では、全然成果が現れませんでした。監督が見ている見ていないに関係なく、とにかく自主練習を続けました。そして最後の大会を迎え、ぼくは3塁手としてレギュラーになることができました。

甲子園行きを決める最後の千葉県大会では、だれも予想し得ないことが起こりました。勝ち進んだ3回戦では、延長戦に入り、ぼくは試合を決める3塁打を打ちました。それまで練習や、試合でも1本も打ったことがない3塁打をいちばん大切な公式戦で打つたのです。しかもそれだけでは終わらず、4回戦でも試合を決める3塁打を決めることができました。5回戦では残念ながら負けてしまいましたが、全国でも激戦区として有名な県大会の177校中ベスト16まで進むことができました。負けはしましたがベスト16で満足でした。悔いもなかったし、悔しい気持ちもありませんでしたが、なぜか涙が出ました。みんなで声を出して泣きました。

試合の朝は、いつも父が祝福をしてくれました。大会では、自主練習の成果が現れたということもあるかもしれませんが、ぼくの力で打つたとはとう



3塁手として活躍した三浦礼久兄弟

てい思えません。3塁打を打った感触は、今もぼくの手の中にはっきりと残っています。それと同じように、神様が打たせてくださったという証がぼくの心の中にはっきり残っています。

また3年間1日も休まず、大きなけがもなく終えられたのは、ぼくだけでした。これも神様の祝福だと思います。

高校3年間でとてもいい思い出ができました。たくさんのことを学びました。精神的にも、肉体的にもつらいことがたくさんありましたが、野球をやめなくてほんとうによかったと思います。

この経験から、末日聖徒として最後まで頑張らなくてはいけないという気持ちと、最後まで努力しようという思

いを持つことができました。最後まで続けられたら神様からの祝福を頂けると知ったからです。「キリストの言葉をよく味わいながら力強く進み、最後まで堪え忍ぶならば、見よ、御父は、『あなたがたは永遠の命を受ける』と言われる。」(2ニーファイ31:20) (みうら・よしひさ)

クラブ活動と 安息日のはざままで

——「将来主のために働く良い備えとなるように」——

東京東ステーク鎌ヶ谷ワード
三浦京子

子供を育てることを通して予測もつかないことを経験し、悩み、戸惑い、子供と一緒にわたし自身も成長させていただきました。二人姉妹の長女として育ったわたしですが、天父より託された子供は男児ばかりです。男の子が、幼児期から少年、そして青年へと成長していく過程を身近に知らないのも、最初は男の子を育てることに不安を感じていました。また、将来の神権者を育てるというプレッシャーもありました。

子供たちが小さいときは、女二人で育ったわたしには驚くことばかりでした。いろいろな物、どちらかという

ごみのたぐいのような物を宝物のように拾って持ち帰りましたし、飼育箱にとかけを何十匹も入れて帰って来たり、泥だらけ傷だらけで帰って来ます。おかげで、少々のことには驚かなくなり、当時は昆虫やとかけ、かえるなどを平気で触れるようになっていました。

子供たちとの4つの約束

小学校に上がり、3、4年になったころ、少年野球のチームに入りたいと言いました。これには、ほんとうに戸惑いました。主人と相談し、子供ともよく話しました。何度も祈りました。野球を許可するのは、安息日に教会に行かないことを認めることになるのですから、ほんとうに悩みました。子供

は9歳、10歳ですので、親がだめと言えば、恐らくあきらめたでしょう。信仰の薄いわたしたちには、どうしてもそれができませんでした。何度も祈り、子供たちに安息日を守ることを、教会に行くことの重要性を教えました。祈りの答えは、はっきりとは分かりませんでした。ただ、子供たちを頭から押さえつけてはいけないという気持ちが強くなりました。

主人と相談の結果、やらせてみようということになりました。その代わり大事な約束と言って、子供たちと4つの約束をしました。①聖書をよく読むこと。②祈ること。③日曜日に練習、試合のない日は必ず教会に行くこと。④両親は教会に行くので、応援に行けなくても一人で頑張ること、です。そして許した以上、子供に教会に行かないことであれこれ言わないようにしよう、また子供の信仰を育てるため、親がしっかりしなければいけない、そして子供たちが教会に行くときに野球をやっていることでつらい思いをすることがあれば、子供たちを守ろうと夫婦で決心しました。

「まずいんじゃないの」と教会の友人たちは親身になってアドバイスしてくださいましたが、子供たちと話し合って決めたことだからと方向転換はしませんでした。子供たちも、許可をしてもらったという負い目を感じていたのかわかりませんが、約束はよく守りました。

小学校のころの遊びのような野球も中学、高校へと上がるにしたがい厳しいものとなりました。子供とした④の約束の一部を変えなければならなくなりました。高校の野球部には、父母協力会というのがあって、合宿時など親が当番で手伝いに行かなければならないからです。

行って気がついたことですが、家族で一致して子供の野球を支えているという感じでした。両親ともども熱心な方たちばかりです。当番のときにしか行かないのは、わたしたちくらいなものでした。

野球で鍛えられる子供

手伝いに行った日は、グラウンドでの

苦しむ打線救う4安打

「(安房・鈴木康投手は)カーブがいいんで、ストリートだけを狙っていた。思い通りのバッティングができた」とニコリ。「きょうはよぎボールが見えませんでした」。鈴木康投手の好投に、打線全休が苦しんでいた4回、0-0の均衡を破る中前打。1点リードの8回には、一、二塁に走者を置いて、会心の当たり。打球は懸命に追う中投手の頭上を越した。

飯田主将とともに卒業でも理系の選抜クラスに属し、成績もトップクラスだという三浦君。吉田監督は「勉強も練習も、とにかく何でも一番やる子。努力が実ったんでしょう。私もうれい」と手放して褒める。而立できていると思う。でも今は勉強を忘れて、野球一本です。三浦君は精いっぱい野球を楽しんでいる。



敬愛君 4打数4安打4打点。千葉
葉浦 敬愛の7番打者、三浦礼久選
手が先制打と、試合を決定づ
ける2点三塁打を放った。

『千葉日報』1995年7月24日付



三浦ご家族。礼久兄弟は右端

練習の様子が見られます。息子はよく先生にしかられ、どなられ、おしりをバットでたたかれたりもしていました。見ているのがつらく、胸が詰まる思いをしたことが何度かありました。そんなとき、練習の応援によく行っておられる先輩のお父さんから「三浦君はよくやっていますよ。彼は怒られ役だから、お母さん、よく励ましてやってください。怒られ役というのは大事な役なんです。先生はその点をよく知っていて、この子なら怒っても大丈夫という子を怒っているんです。他人のために怒られているようなものですよ。」

それを聞いたときから、わたしの考えは変わりました。野球を通して子供が鍛えられ、訓練してもらっていると感じ、感謝の気持ちがわいてきました。他人のための怒られ役になり、先生にしかられているときも脱帽し、頭を下げ、先生の言葉が終わると深々とおじぎをして「ありがとうございます」と大きな声でお礼を言っている息子の姿を見て、わたしではここまで鍛えられないと思いました。たたかれた後で

もそうでした。

先輩との上下関係、体力の限界までの練習、どれを取ってもわたしにはしてやれないことばかりです。何度かやめたいと言う子供を最後まで頑張りなさいと励ましました。しかし、一生懸命やれば、まじめに努力すれば試合で必ず打てる、結果が出せるというものではないのが現実です。朝早く出かけ、夜は11時過ぎに帰ってきます。疲れて、玄関で靴を脱ぎながら寝ていることもありました。そんな息子に頑張れと心の中で毎日声をかけていました。そして、この訓練が将来主のために働くときの良い備えとなるようにと毎日祈りました。

何のためにそこまで練習するのの理解できたのは、3年生の夏の大会、甲子園をかけた県大会でのときです。その大会こそ、頑張った者の晴れ舞台だったのです。プラスバンド、チアリーダーの華やかな応援、スタンドを埋める全校生徒、父兄、OBの応援など、こうした晴れ舞台で平常心でプレーするためには、相当の訓練がいるのです。

3年の夏、最後の大会で信じられないことを経験しました。大会前、息子は不調で、練習試合で全然打てないと言うのです。公式戦の朝には毎試合、主人は息子を祝福し、よく祈るようにと言って送り出しました。その結果、すべてのチャンスに打点を上げることができ、確かに主から祝福されたことを感じたようです。どのくらい努力すれば、神様が助けてくださるかを息子は体で経験したようです。

「後輩にいちばんいいものを残してくれました」

甲子園出場は夢の夢で終わりましたが、大会の後、監督である先生がわたしのところに来られ「お母さん、三浦はほんとうによくやってくれました。三浦がいちばんバットを振っていたのを知っていました。いちばん努力していたのを知っていました。ありがたいことに、それを見ていたのは後輩たちです。後輩にいちばんいいものを残してくれました。わたしが何も言わなくても、後輩は三浦をまねてやってくれます。夏の大会で結果を出すには、努力しかありませんから」とおっしゃいました。

息子は少年期から青年期へと、わたしの不安を吹き飛ばして成長してくれました。神様に感謝の気持ちでいっぱいです。息子を鍛えてくださった監督をはじめ、すべての方々に感謝しています。部活を通して得られた経験を生かして、これからの人生を頑張っしてほしいと願っています。(みうら・きょうこ 日曜学校教師)

「ジョセフ・スミスの示現」の前で

——オープンハウスにおける改宗——

大阪堺ステーク堺ワード
小松愛子

古き伝統を脱ぎ捨てて

母は、わたしと妹がバプテスマを受けて以来26年間、クリスマス

には教会に来てくれました。日本古来の宗教の熱心な信者である母は、この13年余り、その教職を務めるほどの信心深い人ですが、ワードの大きな活動や東京神殿のオープンハウスにも出席してくれました。

母はイエス・キリスト様が大好きだったのです。子供のころ、太鼓をたたきながら「信じる者は救われる」と唱えて歩く牧師さんの後をついてよく歩いたものだと話してくれました。母の幼い心の中に植え付けられたイエス様は、母にとってはいつまでも否定することのできない神様だったのです。

『モルモン書』の中で「先祖の言い伝え」(アルマ9:16)という言葉を目にするとき、いつも母を思い浮かべたものです。日本人特有の信仰、何事に



大湾きくえ姉妹（左から5人目）のバプテスマ会。左から4人目が小松愛子姉妹、3人目が小松姉妹の妹さんの杉本美智子姉妹。

今年4月22日から1週間、毎日朝10時から夜9時まで開催された堺ワードでのオープンハウス（1970年の大阪万博のモルモンパビリオンに倣った伝道方法）には、宣教師、会員を含め約250人の来場があり、アンケートに答えてくださった教会員でない方が34人、そのうち13人が求道者になった。



も頭を下げ、一粒のお米にも命があるという感謝の心、太陽にもまた道端のお地藏様にも手を合わせる姿は美しいものです。母はまさにそのような女性でした。だからこそ、先祖から受け継いだ宗教を大切に、また人一倍熱心だったのです。

いつかこんな話をしてくれたことがあります。「あなたたちが、わたしが教会に入ってくれたらいいと思っているのは分かっている。でもな、わたしは自分が信じてきたものに背を向けることはできないや」と涙を流して話してくれました。そして、「あなたたちが神様の国に行ったら、わたしをそこに引き上げてくれるようお願いします」と……。

わたしと妹の家族は、皆モルモンです。そんな中で母なりに心を痛めてい

るのだと思うと、それ以上何も言えませんでした。それでも、一緒に「家庭の夕べ」を行い、いつも宣教師や会員の訪問を喜んで受け入れてくれました。

オープンハウスって何だろう

約3か月の準備を終えて、まさに始まろうとするオープンハウスの前日、いつものように「お母さん、オープンハウスに来てくれる」と誘いました。もちろん妹の家族からも同じように誘いがありました。

母は喜んで来てくれました。第3日目の出席者名簿のトップに「大湾おおわんきくえ」と書くと、2階の部屋に案内されました。母はオープンハウスと聞いたので、どこかの部屋をきれいに改装でもしたのだろうと思っていたそうです。

福音を紹介するために、救いの計画に添って装飾された各部屋をステーキ宣教師に案内されました。創造の部屋、イエス様の生涯、回復の部屋、そして最後にリラックスルームで感想を話しているとき、そのステーキ宣教師から「お母さん、家族で永遠に住めることは素晴らしいと思いませんか」と聞かれて、母はほんとうにそうきたらどんなに幸せだろうと感動していました。「宣教師のレッスンを受けてみない」と聞くと、「わたしでも受けられるかしら」と答えたのでびっくりしました。

宣教師のレッスンが始まって

こうしてレッスンが始まるのを見て、わたしは、このレッスンが何を意味するのか母は分かっているのだろうか、少し不安になりました。

レッスンの最後に母がこう言いました。「私事ですが少しお話ししてもよいでしょうか。」「何ですか。どうぞお話しください。」母は続けました。「わたしは何十年もある宗教を信仰し、また修業も受けてきました。つまり、わたしの頭も心も石のように固まっています。でも、これを打ち砕くには自分の決心が必要だと思います。それは自分でしかできないことですし、しかも長くかかるとは思いますが、宣教師の皆さん助けていただけますか。」わたしはこの言葉の中に、成り行きでレッスンを受けたのではない母の固い決意を強く感じました。しかしそのとき、このオープンハウスで母の心に何が起きたかは、わたし自身気づいていませんでした。

まさに奇跡は起こっていたのです

「神は奇跡の神であることをやめてはおられない。」（モルモン9：15）オープンハウスに誘われて案内されるまで、教会の教えを聞こうとも、ましてや改宗など思ってもいなかった母が、4つの部屋を次々に案内され、温かいものを感じながら、回復の部屋の「ジョセフ・スミスの示現」の前に来たとき、心が高鳴り、自分では分からないけれど体が何か熱いもので覆われるの

を強く感じたそうです。

身も心も何かの力によって持ち上げられるようだったと話してくれました。この方が天のお父様だと知ったとき、うれしさに涙があふれ、ほんとうにイエス・キリスト様とよく似ていらして、やっぱり親子なんだと実感したそうです。「何も心配いらない。この方に従っていこう」と思ったそうです。わたしには、確かに御霊が働いたのだと分かります。そして母の心は開かれたのです。まさに奇跡が起きたのです。

石の心を打ち砕くために

そればかりではありません。石のように固い塊の心を砕くために、母も長くかかると思っていました。宣教師のバプテスマチャレンジにも「わたしは長くかかると思いますので」と言っていました。でもわずか1週間でバプテスマの決心をし、2週間でレッスンを終え、5月19日の目標日までの残りの1週間は、ほんとうに待ち遠しいようでした。バプテスマの下着のドレスも自分で縫って少女のように準備していました。このようにスムーズにレッスンを受けられたことを次のように話しています。「宣教師が神様の使いだと強く感じました。そして、その言われる言葉のとおりになれば間違いなく神様のもとへ導かれると思いました。」

今、暇あるごとに背中を丸めて『モルモン書』を庭先で読んでいる母の姿を目にしています。ふと、ほんとうに奇跡が起こったのだと実感します。

神様は お忘れになっていません

「見よ、あなたがたに言うが、何も疑わないでキリストを信じる者には、キリストの名によって御父に求めるものは何でも与えられるであろう。この約束はすべての人に、すなわち地の果てまで及ぶものである。」(モルモン9:21) わたしたちは祈り続けることがあまりに長きにわたるとき、いつの間にか神様にお祈りしていたことを忘れてしまっているときがあります。しかし神様はお忘れになってはいません。「わたしは自分の言葉が確かであることを証明する。地の果てに至るま

で、そのとおりにする。」(モルモン9:25) 確かに神様はその言葉が真実であることを証明してくださいました。最後まであきらめないで堪え忍ぶことの大切さをしみじみ感じました。

今、妹の杉本姉妹とともに母のバプテスマ後のレッスンをさせていただいています。反対に教えられることがたくさんあります。母は「またあのようなオープンハウスがあったらいいね。お友達を連れて行きたいなあ」と話していました。

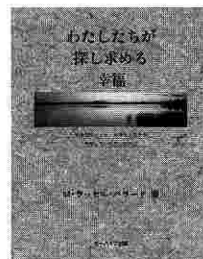
オープンハウス

そもそも堺ワードのオープンハウスが計画されたのは、1月中旬のことで、堺ステーク、ならびにワードの今年度のテーマが「伝道」であり、神戸伝道部の松下泰洋部長の「奇跡が起こる」というビジョンに対して、会員伝道の実践プログラムの一つとして計画されました。ですからワードの会員の一致と祈りがなければできないプログラムです。主イエス・キリストが、このオープンハウスに「準備された人々を導かれる」という信仰をもって、主がお連れになる人、一人のために最大の努力を傾けるという熱意をもって取り組みました。

わたしと妹がステーク宣教師に召されたとき、今年の改宗者見込みリストに母の名前を一番に挙げました。神殿に度々参入して名前を書き、祈り続けてきました。まさかオープンハウスの第1号の改宗者になるとは夢にも思っていないのですが、今から思えば、主が準備された人だったのです。母は、たまたま最初の改宗者でしたが、これからのたくさんの奇跡が見られるでしょう。

オープンハウスのために、たくさんの人々の助けがあったことを心から感謝申し上げます。堺ワードの会員だけでなく、堺ステークの方々、またほかのステークからも来てくださいました。そして、伝道部長の助けによって、多くの宣教師の方々や求道者の方々が来てくださったことを心より感謝申し上げます。確かに御霊によって一致できたことを証申し上げます。(こまつ・あいこ ステーク宣教師)

新刊紹介



十二使徒定員会会員
M・ラッセル・パロート著

ビーハイブ出版発行
A5版 上製本 160頁
カタログ番号
80870 300
定価1,300円

●『わたしたちが探し求める幸福』

末日聖徒イエス・キリスト教会を
理解していただくために

イエス・キリスト、背教、回復、『モルモン書』、神権など末日聖徒の教義を分かりやすく解説した入門書。親族、友人に教会を紹介するために最適の書物。『奇しきみ業』に代わる書物として、公式の伝道活動において使用することが承認されている。

本書の著者パロート長老は、前文で「他の宗教を信じる多くの方々も、喜んで原稿を読んでくださいました。これらの方々の貴重な意見を取り入れることによって、この本のメッセージはより明白でわかりやすく……なったと思います」と記している。教会外の方々に教会の信条を理解していただくうえで、本書は格好の手引きともなり得よう。(本書は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式出版物ではなく、本書に書かれた見解は著者の責任であり、必ずしも同教会あるいは出版元の立場を表すものではない。)

●『モルモン書』CD (英語朗読)

カタログ番号50023
CD 23枚組
定価3,200円

すでに販売されている英語朗読のカセットテープ(全23巻、カタログ番号52047、2,200円)をコンパクトディスクに収めたもの。章ごとにインデックスがついているので検索がしやすい。

●『教義と聖約物語』(改訂版)

カタログ番号31122 300
A4変 定価500円

オールカラー絵物語。新版末日聖典に準拠して改訂。『モルモン書ものがたり』『旧約聖書物語』はすでに改訂されている。

10月に召された専任宣教師

第205期生 11人



前列左から1-5, 後列左から6-11

〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 岩本真理	大阪東S / 茨木第一W	東京北伝道部
2. 三木亜希子	神戸S / 神戸W	福岡伝道部
3. 杉浦靖子	名古屋S / 名東南W	仙台伝道部
4. 吉本ゆかり	岡山M / 松山D / 松山B	東京南伝道部
5. 堀井波留子	大阪北S / 千里中央W	東京北伝道部
6. 高橋一広	東京S / 三鷹W	仙台伝道部
7. 与那嶺真一郎	沖縄那覇S / 沖縄W	神戸伝道部
8. 山本武弘	大阪堺S / 河内長野W	東京北伝道部
9. 大谷朋弘	名古屋M / 富山D / 高岡B	仙台伝道部
10. 日坂信幸	名古屋S / 名東南W	岡山伝道部
11. 浅井直也	横浜S / 横浜第一W	岡山伝道部

S: ステーキ, M: 伝道部, D: 地方部, W: ワード, B: 支部

役員の変動

1996年9月13日から1996年10月13日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

- 東京北伝道部長野地方部諏訪支部
支部長: 平林清準
- 神戸伝道部御坊地方部御坊支部
支部長: 濱田耕一
- 神戸ステーキ明石ワード
監督: 小森愛一郎
- 沖縄那覇ステーキ沖縄ワード
監督: 玉城 弘

新設ユニット

- 東京北ステーキ上尾支部(浦和ワードより分割) 支部長: 根本 進

皆さんの原稿を募集しています

◎ご投稿の際には連絡先(住所, 電話番号), 教会での責任(役職名), 所属ユニット名を記入し, 写真を同封のうえお送りください。原稿は一部手直しさせていただきますことがあります。

◎お願い——海外に召される日本人宣教師たちを紹介いたします。伝道の召しを受け取り次第, 編集室に写真を添えてお知らせください。(氏名〔フリガナ〕, 伝道部名, 召された月を明記)

◎あて先: ☎106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会 『聖徒の道』編集室

☎03(3440)2666 FAX 03(3440)3275

訂正 10月号ローカルページp.2の右段下から4行目: 『エンサイン』(Ensign) → 『インブループメントエラ』(Improvement Era)。

p.9の中段上から16行目: 1946年→1949年。
p.8の写真説明: ハリソン・T・プライス長老は, 右から4番目ではなく, 左端。

11月号ローカルページp.16の酒田支部支部長: 阿部純三→阿部敦三。
おわびして訂正します。

海外に召された日本人宣教師



山崎 円
ソルトレーク・テンブルスク
ウェア訪問者センター伝道部
1996年9月
神戸M / 御坊D / 御坊B出身



畠西 満
カルフォルニア・ロサンゼルス
伝道部
1996年10月
仙台M / 盛岡D / 盛岡B出身

10月に召された専任宣教師 第205期生 11人



前列左から1-5, 後列左から6-11

〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 岩本 真理	大阪東S / 茨木第一-W	東京北伝道部
2. 三木 亜希子	神戸S / 神戸W	福岡伝道部
3. 杉浦 靖子	名古屋S / 名東南W	仙台伝道部
4. 吉本 ゆかり	岡山M / 松山D / 松山B	東京南伝道部
5. 堀井 波留子	大阪北S / 千里中央W	東京北伝道部
6. 高橋 一広	東京S / 三鷹W	仙台伝道部
7. 与那嶺 真一郎	沖縄那覇S / 沖縄W	神戸伝道部
8. 山本 武弘	大阪堺S / 河内長野W	東京北伝道部
9. 大谷 朋弘	名古屋M / 富山D / 高岡B	仙台伝道部
10. 日坂 信幸	名古屋S / 名東南W	岡山伝道部
11. 浅井 直也	横浜S / 横浜第一-W	岡山伝道部

S : ステーク, M : 伝道部, D : 地方部, W : ワード, B : 支部

役員の変動

1996年9月13日から1996年10月13日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動 (敬称略)

- 東京北伝道部長野地方部諏訪支部
支部長: 平林清準
- 神戸伝道部御坊地方部御坊支部
支部長: 濱田耕一
- 神戸ステーク明石ワード
監督: 小森愛一郎
- 沖縄那覇ステーク沖縄ワード
監督: 玉城 弘

新設ユニット

- 東京北ステーク上尾支部 (浦和ワードより分割) 支部長: 根木 進

皆さんの原稿を募集しています

◎ご投稿の際には連絡先 (住所, 電話番号), 教会での責任 (役職名), 所属ユニット名を記入し, 写真を同封のうえお送りください。原稿は一部手直しさせていただくことがあります。

◎お願い——海外に召される日本人宣教師たちを紹介いたします。伝道の召しを受け取り次第, 編集室に写真を添えてお知らせください。(氏名〔フリガナ〕, 伝道部名, 召された月を明記)

◎あて先: ☎106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会 『聖徒の道』編集室

☎03(3440)2666 FAX 03(3440)3275

訂正 10月号ローカルページp.2の右段下から4行目: 『エンサイン』(Ensign) → 『インブループメントエラ』(Improvement Era)。

p.9の中段上から16行目: 1946年→1949年。
p.8の写真説明: ハリソン・T・ブライス長老は, 右から4番目ではなく, 左端。

11月号ローカルページp.16の酒田支部支部長: 阿部純三→阿部敦三。

おわびして訂正します。

海外に召された日本人宣教師



山崎 円
ソルトレーク・テンブルスク
ウェア訪問者センター伝道部
1996年9月
神戸M / 御坊D / 御坊B出身



葛西 満
カルフォルニア・ロサンゼルス
伝道部
1996年10月
仙台M / 盛岡D / 盛岡B出身